

---

# 君との共鳴

村瀬むか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君との共鳴

### 【Nコード】

N66130

### 【作者名】

村瀬むか

### 【あらすじ】

代々『言霊使い』を生業として影で『闇喰い』から人類を守るべく戦ってきた四季一族。

南もその末裔だ。

ある日双子の姉の北斗と共に高校へ通う時、事故に遭いそうになった転入生の内藤寛を助けた際、事もあるうに一目惚れをしてしまった南。

同性に惚れてしまった事に対して葛藤するが、影では再び闇喰いが動き出そうとしていた。

「ことだま言霊って知っているか？」

言葉に宿るとされている霊的なものだ。

俺は代々言霊使いを生業として生きてきた裏社会に生きる四季しき一族の末裔である。

四人兄弟の一番歳下で、一番力が弱い。上から東吾、西伊さい、北斗、南。

4人兄弟でそれぞれその名に東西南北が入っているので、笑える話だろう？だが、この中で東西南北が何故、東西北南となっているのは、俺と双子の姉の名前をつけるとき間違ったとか、嘘かまことか判らない事情があったらしい。

そう、俺の名は南。

「南、何をしている。行くぞ」

そう声をかけてきたのは俺とそっくりな顔の双子の姉、北斗だ。

この男の俺より男っぽい人には腹がたつ。おかげでいつも俺が双子の妹として、間違われるのだ。

唯一の違いが、北斗は尻尾みたいな長い髪を後ろで括っているだけ。

「今行くよ」

俺は鞆を持って、いかにも伝統のある屋敷から北斗を追うように出た。広いだけで何のありがたさもないのに、何故かたまに拝まれたり写真を撮られたりするのが不思議だ。

俺と北斗は同じ高校の一年生。兄貴達は大学生だ。

学校に向かいがてら、

「お前、また修行をサボったな？」

鋭い目をした北斗に睨まれ、俺は思わずたじろいだ。

「だって、しょうがないじゃん。俺には言霊使いとしての才能ないんだから」

優秀な姉と比べられ、いつも齒がゆい思いをしてきて、それは絶望

へと変わり、最後は諦めた。

「私は、実力はお前の方が上だと思っているぞ？」

「そんな事ある訳ないじゃん」

俺は少し不貞腐れて北斗を見た。

…高校が制服で良かった。

辛うじて制服が俺と北斗を男女と分けている。

「それに、兄貴達がいるし、俺は稼業を継がなくてもいいし」

そう、その安心感が俺を余計にサボリへと持っていくのだ。

「お前の戯言なぞどうでもいい。帰ったら一緒に修行をするのだぞ」

「へいへい」

俺は空返事をして北斗の後へ続いた。

いつもの登校風景。

人通りや街並みは変わらない。

俺達は大きな坂道の中にある商店街を抜け、大通りへ出た。

信号は青。いつものように、横断歩道を渡ろうとすると、一台のト

ラックがやってきた。

危なっかしいなあ…。

そう思っていると、信号が赤なのに止まる気配は見せず、それどころかこちらへ突っ込んでくる。

俺達の数歩先を歩いている同じ制服を着た男子学生が、今にも轢かれそうだと。

危ない！

「止し！」

無意識のうちに俺は言霊を使い、トラックを止め、男子学生を庇い歩道に倒れこんだ。

「危なかったな。大丈夫か？」

俺は手を差し伸べ、その男子学生を助け起こした。

「あ、ありがとう…」

少し引きつった笑顔を浮かべた男子学生と目が合った瞬間、事もあろうに俺は。

その男子学生に恋をしてしまった…。

「えー、今日から同じクラスで勉強をする内藤寛君だ。皆、仲良くするよ。」

男らしく日焼けした肌に合う短髪に、爽やかな笑顔。俺より高い背。

「内藤です。よろしくお願いします。」

俺はその内藤をじっくり見た。動きの一つ一つが様になっている。

… かつこいい。

いや、そういう問題じゃないだろ！俺は男だぞ？男が男に惚れてどうする？

だけでも俺の視線は内藤に向いてしまう。

いいなあ。どうしたらあんなに男らしくなれるんだ？

やっぱり北斗と俺は性別が入れ替わっているんじゃないだろうか？まるで女の思考だ。

内藤が俺を見た。視線に気づいたのだろうか？

俺は慌てて視線をそらし、教科書を見つめた。

でも心の中では俺の目は内藤に行っている。

やばいなあ。

辛うじて保っていた男のプライドが、ガラガラと崩れ去る音がする。でも、どうしてあの瞬間に言霊が出てしまったのだろうか？

休み時間にも北斗に聞きに行くか。

双子なので、俺達は当然違うクラスだ。

噂では北斗は女子学生にモテモテだと聞いた。そんな中に入るのもなんだしなあ。

でも、一応は基礎が出来ているおかげで、俺は内藤を助ける事が出来たのだ。

少しは感謝しないと。

でも、修行はかつたるいな。

ちっとも授業に集中出来ず、俺の思考はさ迷ったまま、昼休みを迎

えた。

さて。北斗のクラスに行くか。  
立ち上がった俺の前に内藤が現れた。

「今朝はありがとう。君の名前は？」

声をかけられた瞬間、俺の鼓動が早くなった。こら、静まれ俺の鼓動！

「俺は、四季南しきみなみ。危ないところだったな」

この胸の高まりが聞こえないよう、祈った。

「よろしく。四季君」

あれ？俺の名を聞いても笑わない。いつもなら、「女みたいな名前」と言われるのに。

こいつつてもしかしてとてもいいヤツじゃないか？

そう考えていると、内藤が、

「ところで、職員室に行きたいんだけど、案内してもらえるかな？」  
などと言ってきた。

何故、俺？

「いいよ。職員室はこっちだ」

俺の心の声とは別に、いつもの姿で対応している。

俺達は教室を出て、廊下を歩きながらあちこちを案内しつつ、職員室へと向かった。

「ところで内藤はどこから転校してきたんだ？」

俺が聞くと内藤は、

「M市からだよ」

M市か…。あそこはやばいと聞いた事がある。俺達言霊使いとはちよつと違う組織が存在する、と俺が子どもの頃にじいちゃんが言っていた。

「よく、無事に過ごせたな…」

「え？」

思わず口から出た言葉に、内藤は耳を傾ける。

「いや。何でもない」

俺は言葉を濁し、さっさと内藤を職員室へ案内した。

「ここが、職員室だ」

そう言つて去りかけた俺に向かつて内藤は耳元で、

「ありがとう。…君、可愛いね」

と言つてきやがった。

赤面した俺の気持ちを横に、内藤は職員室の中へ入つて行つた。

よりによつて…。

男の俺に可愛いだと？

もしかして、あいつは要注意人物ではないか。危ない危ない。

あいつはきつと遊び人だ。

そう言い聞かせる事で、俺はこの気持ちを抑えた。

それより、北斗に会いに行かないと。

俺は元来た廊下を戻り、北斗のクラスへと向かつた。

クラスを覗き、北斗は女子学生に囲まれるような形でお弁当を食べ

ている姿を確認した。

「北斗、ちよつと」

俺は北斗を呼んだ。

「何だ？」

北斗が廊下まで出てくる。俺達のツーショットの何処が楽しいのか、女子学生達が喜んで俺達を見ている。

しかし無視。

「今朝の事なんだけど」

「ああ、今朝の事な。サボり癖のついたお前にしては上出来だったじゃないか」

北斗は上から目線で話してくる。

「いや、何故俺はあの時とっさに言霊が出たんだ？」

疑問をぶつける。しかし北斗は、

「そんな事は私を知るか。ただ、お前の本当の実力が出ただけだ。

用はそれだけか？帰ったら一緒に修行するぞ」

そっぴい残して女子学生の輪の中へ戻って行つた。

…これは、声をかけるべきでは無かつたのかも。

何故か嫌な予感がして、俺は自分のクラスへと戻つた。

「おい、四季」

クラスへ戻つた瞬間、俺はクラスメイトの平野に声をかけられた。

この平野は何故かいつも俺にくつついてくる変なヤツだ。ちよつと女にモテているだけで調子にのつている馬鹿だ。それに、噂で聞いた事がある。俺を落とすか落とさないかで賭けをしているとか何とか。

冗談じゃない。

何故俺が平野如きに落とされなきゃいけないんだ？

いつも自信たつぷりな余裕を持った顔つきで、俺に甘い声をだしやがつて。

「なんだよ？」

俺は返事をするのにもかつたるいのに、その声に気づかないのか、平野は、

「今度の日曜、一緒に映画を観に行かないか？」  
と、誘つてくる。

「ごめん、日曜は家の手伝いする事になつているんだ  
やんわりと断る。しかし平野はしつこく、

「半日でいいんだよ。映画を観に行くだけ。行こうぜ」  
と言つてくる。あー。もつづざいなあ。

「本当に家の手伝いがあるんだよ」  
「そんなの気にしなくていいから」

……。あまりにしつこいので俺は言霊を使いかけた。本当はこんな事で使うのは禁止されているんだけど。背に腹はかえられない。

「も……」

「ちよつと、四季君。聞きたい事があるんだけど」

背後から内藤の声が聞こえた。俺の心臓が飛び上がりそうだ。

内藤は平野に向かって、

「ごめん、ちょっと先生に言付かったったんだ」

と、言いながら俺を平野から離してくれた。

心の中で安堵のため息をつきながら、

「で、何？言付かった事って」

なるべく内藤を見ないように、微妙に視線を逸らしながら聞いた。

「いや、なんでもないよ。ただ君が困ってそうだったので、ああ言っただけだ」

「へ？」

もしかして、俺を助ける為に嘘をついたのか？

「気をつけなよ。ああいうやつは二人つきりになると何をするか判らない」

「…判っているよ。用はそれだけか？」

「いや」

内藤はにっこり笑って、

「良かったらお弁当、一緒に食べないか？」

下心を感じさせない笑顔で、俺の心臓はまた、高鳴ってしまった。

「そもそも『言霊』とは、言葉に宿す事で効果を得る事が出来る。

したがって、その精神力もより深く、冷静にならなければならぬ。

例えば

強引に北斗の修行に付き合わされた俺は、道着に着替え屋敷の敷地内にある道場にて、得々と語るじいちゃんの声に耳を傾けながら座禅を組まされていた。

ちらりと、隣の北斗に目をやる。北斗は精神を集中させているのか、目を瞑り、微動だにしない。

「したがって、このように。喝！」

その声には俺はまるで電撃を浴びたかのような刺激を受けて、横に倒

れこんでしまった。

北斗は平然としている。

「南、何を考えておった？この程度の影響を受けるようじゃあ、お前もまだまだじゃのう」

「かつつか、と笑い、じいちゃんは再び真剣な表情になる。

「時にこの時代に、我々人類の敵が存在しておる。それは何か言うてみよ、北斗」

「はい。それは『闇食い』です。おじい様」

じいちゃんは満足げにうなずき、

「そうじゃ、『闇食い』じゃ。闇食いとはどういう存在か、南、答えてみよ」

鋭い視線を投げかけてくる。

その気迫に負けそうになりながら、

「闇食いとは、人間の心の隙間を操り、人間達を惑わす姿無き存在だろ？」

先程の衝撃がまだ残っているのか、俺は苦しい思いをしながら、再び座禅を組み、答える。

「うむ。判っているじゃあないか」

そりゃ当たり前だ。小さい時から耳にタコが出来るほど聞かされてきたんだから。

闇食い。それは人間の弱さにつけ入り、言葉巧みに操り最後には死に追いやる形の無い生き物だ。

じいちゃんが現役の言霊使いだった頃、時代のせいもあってか大量に発生したらしい。それを滅したおかげで今の世があると聞かされた。

俺も小さい時はじいちゃんみたいな言霊使いになるのを夢見ていた。でも結果はごらんの通り。双子の北斗に全て才能を吸われたかのようにならぬように無力ときている。

どうして俺はこんな状態なのだろうか？

どうせ稼業は兄貴が継ぐんだし、才能の無い俺を自由にしてくれて

もいいじゃあないか？

だがしかし、北斗は俺の方が才能あると言ってきているし、じいちゃんも俺を修行させようと必死だ。なんで俺？

「だから我々言霊使いにとっては、その一言が重大な意味を持つてくるのじゃ。もし、今闇食いが現れたらどうする？この平和が終わってしまうぞ？」

「その通りでございます」  
優等生の北斗が答えている。

「だから決して心に隙を作ってはいけないのじゃ」  
はいはい、そうですね。

その心境が表情に表れたのか、俺はまたじいちゃんに「喝」を入れられてしまった。

「南、どうしてお前はいつもそうなのじゃ？その才能を自ら放棄してどうする？」

「そんな事言っちゃってよ、じいちゃん」

「なんじゃ？」

「俺には才能なんてないじゃん。なんでいつも修行させたがるのさ？」

思っていた事を口にする。しかしじいちゃんは、

「一体誰がお前に才能が無いと言ったのじゃ？今朝の事は北斗から聞いておるぞ？お前はその一瞬の判断力で人の命を救ったそうではないか」

「それは…」

俺自身も判らない。北斗と一緒にいたのに、何故助けたのが俺なんだ？

じいちゃんは俺をじつと見つめ、

「そもそも我が四季家には不要な存在はいない。お前にも役割があるのじゃぞ？」

俺がどんな役割を持っているというのだ？もうこれ以上、惨めな思

いをさせないでくれよ…。

そんな俺の気持ちも他所に、じいちゃんの修行はまだまだ続く。

「それでは、実戦を試みよう。まず北斗」

「はい」

北斗は立ち上がり、じいちゃんと対峙する。

二人は道場の中を走り回りながら、両人差し指と中指を立ててクロ  
スさせ、

「転！」

「消！」

「消！」

と言いながら真剣な表情で向き合っている。

俺はその光景を、あくびをかみ殺しながら眺めていた。

「滑！」

「あっ！」

北斗がじいちゃんの言葉に負け、その場に滑ってしまった。

「北斗、まだまだ精進が必要じゃぞ？」

「はい、ありがとうございます」

北斗は深々とお辞儀をして、俺の横に戻ってきて再び座禅を組んだ。

「次、南」

「…はい」

俺は渋々立ち上がった。どだい俺なんかじいちゃんに敵うはずがないんだよ。

それでも俺は真剣にじいちゃんに立ち向かった。

「転！」と発したじいちゃんの言葉に引きずられそうになりながら、

「否！」

と答える。

こうなりややけだ。とことんまで付き合おうじゃないか。

「滑！」

「否！」

さっき北斗がやられたパターンだ。俺はそれをも蹴散らす。

じいちゃんがやりと笑う。そう簡単にやられてたまるか！

「停！」

俺も指をクロスさせながら、先制を打って出た。

「消！」

じいちゃんは簡単に俺の言霊を跳ね返す。

さあて、これから先、どう出ようか？

視線をじいちゃんに向けながら、俺は考える。

「岩！」

「…む？」

じいちゃんが岩のように少し固まる。その瞬間を見逃さずに、

「丸！」

「消！」

体勢を整えたじいちゃんがそれをも消し去る。

そうやってどの位過ぎたんだろうか？

「これまで！」

じいちゃんが言い放つと、俺はその場に崩れ落ちた。

「…南、それを忘れるでないぞ？」

そう言くと、今日の修行が終わった。ああ疲れた。俺は道場内の時計に視線を向ける。

…わずか五分しか経っていないのに、この疲れよう。

肩で息をしていると、北斗が「やっぱり、お前は才能がある」なんて言ってくるもんだから、俺はますますムキになって、明日はサボろう、と考えていた。

「おい、南起きろ」

うーん、朝か…。もう少し寝かせてくれよ…。

俺は布団に包まりながら、そう答える。まだ寝ていていい時間だろう？  
しかし容赦の無い北斗のビンタで、俺は目覚めるしかなかった。

一応双子だけと性別が違うので別々の部屋だが、北斗は毎朝俺の部屋に容赦なく入ってくる。

…男の生理を判ってくれよ…。

「おはよう」

「…おはよう」

北斗はいつも規則正しく、制服に着替えてから俺を起こしにやってくる。

叩かれた頬をさすりながら、

「もう少し、優しく起こしてくれよ…。」

情けない声を出す俺に対して、

「何を冗談言っている。起きないお前が悪い」

一言で片付けてしまう。やれやれ。どうせ俺が悪いんですよ。ふんっ！

パジャマ姿のまま北斗の後に続いて食卓に向かうと、母さんが優しい声で、

「おはよう、北斗、南」

と笑顔で迎えてくれる。母さんはこんなに優しい表情で語りかけてくれるのに、どうして北斗はこんなに色気がないんだろ？

いや…それ以上は言わないでおこう。何故なら自分の存在意義を失いそうになったからだ。

「おはようございます」

北斗は俺以外の家族に対しては丁寧語を使う。

でも俺に対しては上から目線だ。

「おはよう、母さん」

俺はこの少女みたいな愛くるしい母さんが好きだ。

でも母さんはこれでも元、言霊使い。一体どんな姿で戦ってきたのだろう？といつも疑問に思う。

「今日のお弁当はこれね。間違えちゃ駄目よ？」

と、俺たちに弁当を渡してくれる。

「ありがとう」

俺は母さんにお礼を言った。じっと見ていると、母さんは恥ずかしそうに俺の肩を優しく叩き、「早く食べなさいよ」と、俺を食卓に

着かせる。

「いただきます」

北斗はかたつくるしい物の言い方で、朝食を食べ始める。俺も早く食べないとまたビンタが飛んでくるかもしれない。慌てて朝食を食べた。

さすがに着替える時は、北斗は気を使って部屋の外で待っていてくれるが、早く着替えないと「早くしろ」と俺を急かす。

別に一緒に登校しなきゃいけない理由は無いのに、それでも北斗は俺を待っていてくれる。

着替えが終わって部屋を出ると、

「さあ行くぞ」

と色気の無い声で言ってくる。

…いやだから、自分そっくりな北斗が色気を出しても気持ち悪いんだけど…。

「行つてきます」

俺達は一緒に学校へ向かった。

登校途中で北斗が真剣な表情をして、

「お前のクラスの平野。いい噂を聞かないぞ。気をつける」

唐突に言ってくる。

「判っているよ。俺は賭けのネタにされているだけなんだから」

「判っているのなら、それで良い。…でも気をつける」

北斗がこういう物の言い方をすると、大概その人物の評価は当たっているの、俺は隙を見せないようにしよう、と心の中で思った。

いつものように商店街を通る。伝統のある屋敷に住んでいるせいか、それとも名前と性別が逆な俺達が物珍しいのか、商店街のおじさん、おばさん達が一斉に挨拶を投げかけてくる。

勿論、俺達が言霊使いとは屋敷以外の人間は知らない。裏稼業だからだ。

挨拶が飛んでくるとその度に北斗は礼儀正しく一つ一つに答えている。俺は手を振りながら笑顔で返す。

商店街を抜けると、背後から急に、

「おはよう」

と声がかかって、俺は一気に心臓が高鳴ってしまった。

…内藤だ。

「お、おはよう」

俺はこの高鳴りを知られないように挨拶を交わす。

「四季君って双子だったんだね」

やめてくれ、そんな爽やかな笑顔をこっちに向けないでくれ…。

俺が一人で葛藤していると、北斗は内藤をじっと見つめ、笑顔で「

おはよう」と答えている。あの北斗が笑顔！今日は雨でも降るんじゃないだろうか…。

「どちらがお兄さん？お姉さん？」

と、内藤は話しかけてくる。

「私が姉の北斗です」

「北斗さんか。内藤寛です。昨日南君に助けてもらい感謝しています」

「昨日は本当に災難でしたね。でもトラックが『急停止』して良かったですね」

…いやそれ、俺が止めたんですけど…。

何か和やかに話しているのを見るとむかつく。

一人不貞腐れて二人から離れるように歩いていると、平野を見つけた。げ、こっちに気づいた。

「四季、おはよう」

かっこつけて挨拶してくる。

「…おはよう」

仕方ないから挨拶を返した。

「で、日曜日、行けるんだろう？」

まだそんな事を言ってきた。なんかむかつきが止まらないので、このまま「行く」と返事をしようと思ったら、北斗が俺を押しわけ、

「ごめんね、平野君。日曜日は私達、用事があるの。本当にごめん

なさいね」

言葉は優しいけれど、口調はキツイ。さっきまで内藤と話していた口調とは明らかに違う。

北斗があれこれ平野と話しながら、俺を見て、目が「早く行け」と語っている。俺はその行動に感謝しながら内藤と先を急いだ。

「あー、疲れた」

俺が思わずため息をついたら、内藤は笑って、

「いいお姉さんじゃないか。弟を必死で守ろうとしている」  
なんて言ってくる。いいお姉さん？誰が??

「しかし、本当に招待を受けてもいいのかな？」

「招待？何の？」

意味が判らず、俺は問いかける。

「聞いてなかった？君のお姉さんが日曜日に自宅に招待してくれたんだ」

え？

なんですと？

俺は言葉が出なくて口をパクパクさせていたら、

「待ち合わせ場所と時間は、君と決めてくれ、と言われたんだ。何時頃に行けばいいかな？俺はまだこの辺の地理がよく判らないから、待ち合わせ場所はあの商店街を出た交差点でいいかな？」

…北斗のやつ、一体何を考えている？

まさか、内藤に惚れたんじゃ…。

胸が痛い。男の俺と女の北斗じゃ、同じ顔でも圧倒的に北斗の方が有利じゃないか…。

何で、俺は男に生まれたんだらう？

なんだか哀しくなってきた。

「内藤の、都合のいい時間でいいよ…」

初恋と失恋が同時に来たみたいだ…。

「じゃあ、十時にあの交差点で」

「うん…」

俺は力なくうなずいた。そうこうしているうちに、クラスに着いて、俺は自分の椅子に座りこんだ。

でも、これで良かったのかも知れない…。

なんせ男同士だ。上手くいくはずが無い。

それより北斗が幸せになった方が、よっぽど良いだろう？

判っている。

判っているけどもさ…。

この胸を締め付ける感情はいつになったら止まるんだろう？

俺は窓の外を見上げながら、一人ため息をついた。

昼休みに、俺は食欲が無かったけど、せつかく母さんが作ってくれたお弁当を残すのも悪いので、お弁当を開けた瞬間、すぐに閉じた。…母さん、お弁当の中身、北斗のと間違っているよ…。

北斗は基本的には好き嫌いはない。というか、せつかく作ってもらったものを残すのは相手に対して失礼だ、という意識が働いて食べるけども、俺はニンジンが苦手だ。てか、大嫌いだ。

このお弁当にはニンジンが入っているし、しかも女の子らしい盛り付け方をしている。

確実に中身が北斗のと入れ替わっている。

急いで取り替えないと最悪な事になる。

俺はお弁当を持って北斗のクラスに急ごうと席を立つたら、内藤が声をかけてきた。

「一緒に食べないか？」

その笑顔に再び胸が痛くなったが、俺はそれを悟られないように、

「う、うん、良いけど少し待って」

と言い残して北斗のクラスへ急いだ。

「なんだ、中身が入れ替わっていたのか。道理でそっけない盛り付けだと思った」

平然として答える。

「弁当取り替えてよ」

「もう遅い。半分は食べてしまったぞ」

「でもこれにはニンジンが入っているんだよ？」

「諦める。残したら承知しないからな」

…やっぱり、思った通りの反応だ。

今日は踏んだり蹴ったりだ。

きつと厄日だろう。

座っていた席に戻りかけた北斗が何かに気づき、またこちらにやってきた。

何だ？念押しか？

と思っていると、

「お前のクラスの内藤君、なかなか好青年ではないか。日曜日に招待しておいたぞ」

…その話が。

「十時に商店街を出た交差点で待ち合わせ。待ち合わせ場所には俺が行くけど、後は仲良くやってよ…」

「何を言っている？私は日曜日に先約があるのだ。お前が招待したのだ。お前が仲良くしろ」

と言い残して去っていく。

何だって？何で俺が招待した事になっているんだ？

全く理解出来ない。北斗のやつ一体何を企んでやがる？

いつまでも北斗のクラスの前で固まっていたら、内藤が呼びにやってきた。

「四季君、食べないのかい？」

俺はその声にゆっくりと振り返り、

「内藤は、ニンジンは好きか？」

引きつった笑みを浮かべ聞いた。内藤は爽やかに微笑んで、

「ニンジンは大好物だよ」

と答える。

「じゃ、じゃあさ、ニンジンあげる」

俺は急いで自分のクラスに戻って、椅子に座った。

「 そういう事か。なら、喜んでいただくよ」

俺はお弁当を開け、ニンジンの内藤に取らせた。

美味しそうにニンジンを食べている内藤に理解が出来ないが、それでも助かった。

ほっとして、食べようとしたら、意味深な笑みを浮かべている。

「ん？どうした？」

俺は聞いてみた。

「いや…」

と笑って、俺の耳元に顔を寄せ、

「やっぱり、君は可愛いね」

と言ってきた。

やめてくれ！

俺はようやく失恋から立ち直ろうとしていたんだぞ？

何でそんな…。

俺はため息をつき、

「日曜日、北斗は先約があるらしいよ。どうする？また今度にするか？」

と聞いた。

「ああ、そんな事を言っていたよ。だから是非君と遊んでくれ、と言われた」

「え？俺と？」

「ここへ引越して来て初めての招待だ。よろしく」

「お、おう…」

俺はもはや考えるのを止め、お弁当を飲み込むように食べた。平野はこっちへ寄って来ない。北斗に何か吹き込まれたか？

「そういえば、君達には上にまだお兄さんがいるらしいね」

「そう。兄貴が二人。俺は四人兄弟の末っ子だ」

別にこれは隠す必要がないので、正直に答えた。

「だからか」

「何が？」

「君は愛情いっぱい育てられてきた。そんな印象だ」

思わずご飯を喉に詰まらせそうになって、急いでお茶で流し込んだ。

「愛情いっぱい？どこが？」

「そういつところだ」

…だから、どこ？

すると内藤は視線を逸らし、

「俺には父が一人いるだけでね。母親は幼い頃に亡くなっているから、家族の愛情つてのが判らないんだ。だからなのかもしれない。

君は温かい感じがする」

…無理やり言霊使いの修行をさせられたり、双子の北斗には上から目線で話されたりしているのに？

「…じゃあ、そのお弁当は？」

「これは俺が作った。そっけないだろう？小学生の時から台所に立つのは当たり前になっていた。

……。

内藤…。

俺はこの痛い感情を何処にぶつけたらいい？

「…心」

思わず無意識に技を使ってしまった。

すると、内藤が泣いた気がした。だが内藤は微笑み、

「今、もの凄く愛情を受けた気がしたよ。不思議だな」

…駄目だ。やっぱり、内藤を諦められない。でも北斗が…。

この日曜日が、

この日曜日が来るまで。

少しは夢見たっていいじゃないか…。

その想いに浸っているその時。もの凄い気配を感じた。

この気配は…。

辺りを見渡した。誰だ？この悪意に満ちた気を発しているのは…。それは一瞬の事だったので、誰が発したのかは判らなかった。

しかし確実に感じた。こんな気を発するのは人間ではありえない。気配が消えた後も、まだ肌がぴりぴりしている。

俺は術を使った。

「…深<sup>しん</sup>」

しばらく待つ。

駄目だ、気配の主はこの付近から消えてしまった。

一体何だったんだろう？誰が誰に発したんだろう？

俺は、今日は修行をサボるつもりでいたが、帰ったら北斗と一緒に修行を受けよう。

そう決意した。

日曜日に、俺は内藤との待ち合わせ場所に、三十分以上前から待っていた。

俺も緊張しているからか、昨夜はろくに眠れなくてしかもいつもなら寝ているはずの六時頃に目が覚めてしまった。

北斗は本当に先約があったらしく、八時には家を出て行ってしまった。

あれからクラス内では気配を感じていない。

本当にあれは何だったんだろう？

俺は最悪な事は考えないようにしていた。  
が。

まるで、話に聞いていた闇食いと同じ気配ではないか？

そんなやつが今の世に発生してしまったら、一体どうなる？  
などぶつぶつぶやいていると、肩をたたかれた。

「こんにちは」

爽やかな笑顔を見せて、内藤が現れた。

「こ、こんにちは」

う、顔がにやけてしまう。

内藤は制服姿も似合うが、白のポロシャツにジーンズ姿もよく似合

う。身長が俺より高いせいもあるが、これではまるでカップルの待ち合いシーンみたいではないか…。

内藤は、何かを手に持っている。

「それは？」

「ああ、クツキーだよ。俺が作ったんだ。口に合えばいいけれど…」  
なんと、俺の好物ではないか！

食べたい！

内藤って結婚したら、きっといい旦那さんになるだろうな…。

俺の胸がまた痛んだ。

男同士では、結婚もクソもないのだ。それが哀しい…。

いやそもそも、俺達は別に付き合っている訳ではないのに。  
とりあえず、家まで案内しなければ。

「家にはこの商店街を通って行くのが一番の近道なんだよ」

と、内藤と二人で商店街の坂を下りてゆく。難点はこの坂だ。行きはしんどいけど、帰りは楽だ。商店街を歩いていると、魚屋のおじさんに、

「お、南ちゃん、今日は彼氏連れ？」

などと言われる。内心ドキドキしながら、

「違うよ。俺男だぜ？ クラスメイトだよ」

と返事をしながら道を歩いてゆく。

内藤は興味深そうに、商店街のあちこちに視線を向けている。

この商店街は、テレビなどにも取材が来た事のある、結構有名な商店街なのだ。

「へえ。なかなかいい雰囲気だね」

まるで俺が褒められたみたいに嬉しくなってくる。

内藤は俺をじっと見つめ、

「四季君って、飽きないね。表情がコロコロ変わってとても楽しい」

「そ、そうか？」

うーん、自分の中ではポーカーフェイスのつもりでいたから、なんか意外だ。

俺が黙り込んでしまうと、内藤が何か言ったような気がした。

「ん？今何か言った？」

と聞くと、内藤は首を横に振り、

「いや、なんでもないよ」

と答えた。

俺の勘違いかもしれないから、あえて深くは追及しなかった。

「ここが、俺の家」

そう言っただけで屋敷を紹介すると、内藤はびっくりしたような表情で見渡している。

「すごいお屋敷だね」

「そうでもないよ。年季が入っているだけ」

内藤を促すように中へ入れた。

「ただいま」

「お邪魔します」

二人で上がりこむと、母さんが出てきた。

「まあ、いらっしやい。北斗と南の母です」

「初めまして。内藤寛です」

と、爽やかな挨拶を交わしている。

「あ、これ良かったら皆さんで召し上がってください」と、クッキーを渡している。

「ありがとうございます。ごめんね、気を使わせちゃったかしら？」

「いえ、とんでもないです。まだ転校して来て間もないのに、南君にはお世話になっています」

「あら、それは良かったわ。うふふ」

何か、母さんの方が嬉しそうだ。俺はちょっと軽いやきもちを感じた。

「あ、内藤は何飲む？」

と俺が聞くと、「いや、何でもいいよ」と遠慮しているが、気を使わなくていいから、と再度聞くと、

「じゃあ、コーヒーをいただきます」

「はい、わかりました」

母さんはにっこり笑っている。

俺は、内藤を連れて自分の部屋へ案内した。

案内したのはいいんだけど…。

元々、招待したのは北斗なのだ。俺ではない。

なので当然、話題が無い。

部屋に二人で固まっていると、なんか、まるで初めて恋人を連れてきたみたいでドキドキする。早く、母さんが飲み物持って来ないかなあ？などと考えていると、

「やっぱり、温かいな」

内藤がぼつりと言った。

「そうか？」

「うん、とても居心地がいい。まるで優しい音楽を聴いているみたいだ…」

そうつぶやく内藤が本当に温かいものに包まれているみたいで、こちまでそんな気分になってしまった。

いつもの部屋なのに、内藤が来た瞬間、それはまるで魔法にでもかかったみたいに鮮やかに色づいている。

不思議だ。

まるで内藤の方が言霊使いのようだ。

目を閉じてゆっくり深呼吸をする。

もし、ここが宇宙だと言われたらそう感じるだろうし、ここが草原だと言われたら納得するだろう。

俺の臉には色々な景色が現れては消える。

そうやって耽っている、ドアをノックされた。

「はい」

「南、はいコーヒーと紅茶。それと内藤君からいただいたクッキー」。

内藤君ありがとうね」

「いえ、とんでもないです。ありがとうございます」

母さんはどうぞごゆっくり、と言いつつ残して去っていった。

待っていました。クッキー。

俺は早く食べたたくて仕方がなかったが、内藤が俺の顔をじっと見つめるので、なんだか気恥ずかしくなってしまうた。

「ど、どうした？」

「いや、なんでもない」

俺の顔を見つめながらそう言ってくるが、なんでもない風には感じない。

「いいから言ってみろよ」

俺は内藤を指で突く。

「本当になんでもないって」

そう言いながらくすぐったいのか身をよじらせる。あれ？内藤って…。

「もしかして、こういうのに弱い？」

俺は更に内藤の身体を突く。そしたら我慢できなかつたのか、大声で笑い出す。

…面白い。

調子に乗って色々な部分を突いていったら内藤が反撃にかかったのか、俺にもおんなじ事をやり返してきたが、生憎俺はそういうのは強い。

「残念でした」

舌を出して笑うと、内藤は俺を押し倒してきやがった。

その瞬間、

時が止まったような気がした。

「な、内藤…」

「なんだ？」

「あ、あの子…」

「ん？」

「お、重いんだけど…」

「…俺をその気にさせた罰だ」

「罰って、あの…」

「黙って罰を受ける」

殴られる！

俺はそう思っただけで覚悟を決めて目を閉じた。

だが、それは意外な形で攻撃してきた。

俺の言葉を封じるかのように、唇を奪われた。

内藤の唇で。

そう、内藤にファースト・キスを奪われてしまったのだ。

俺の心臓はもはや高鳴るところではなかった。

今にも暴走寸前だ。

「初めて会った時から、ずっとこうしたいと思っていた」

内藤はそう言いながら再度、キスをしてくる。

「…でも、俺男だよ？」

「それが？」

「だ、だって北斗がいるじゃん」

「俺は、君に一目惚れをしたんだ。北斗さんではなく、南に」

名前を呼び捨てにされてもちっとも嫌な気持ちにはならない。何故

だ？

もしかしてこれは、ウタカタかもしれない。

だって普通有り得ないだろ？同性同士が同時に一目惚れをして、両

想いになるなんて。

でも確実に、内藤の重みがこれを現実だと語っている。

こんな事…。

一体どうしたらいいのだ？

「次は…」

「次は？」

「俺の家に来て欲しい。親父は仕事で誰も居ないから」

有無を言わさない内藤のキスに、俺は頭がどうにかなりそうだった。いや、それはもしかしたら、良くない事が起きる前兆ではないか？ だってこんな事、あるはずがない。

内藤は、ゆっくりと俺を起こした。

「どうした？ 食べないの？」

「…えっ？」

「せっかく北斗さんから君の好きな物を聞き出したのに。遠慮しないで食べてくれよ。我ながらうまく出来た自信作なのに」

北斗？

北斗…。

……。

あのやろう！ やっぱり企んでやがったな！

俺は怒りと恥ずかしさで、その後自分がどういふ会話をして、どうやって内藤が帰って行ったのか、よく覚えていない。

確か昼飯はうちで食べていったのは覚えている。

だが俺は北斗に対する怒りで、あいつが帰って来てから部屋まで突入していったが、冷静な顔で、

「上手くいって良かったな。着替えるから出て行け」

の一言で自爆するしかなかった。

物心ついた時からそうだ。いつも北斗は俺の前方に行くのだ。

名前と顔つきで、幼い時から北斗が兄、俺が妹扱いされて来たから、余計に悔しい。

俺は風呂に入りながら、今日の事を思い出していた。

内藤…。

本気なのだろうか？

何故、北斗じゃなくて俺なんだ？

例えば俺と北斗が二人並んでいたとする。

でも北斗には女の子達が集まって、俺には見向きもしないか、変人だけ。

「…はあ…」

ため息がこぼれる。

明日からどんな顔で内藤と接したらいいのだ？

「…冷<sup>れい</sup>」

自分自身に言霊を吐くが、上手くコントロール出来ない。

今でも覚えている。内藤の唇の感触。

まさか、そういう展開になるとは思わなかった。

北斗は何故気づいたのだろうか？

確実に俺の気持ちに気づいて、今回の事を思いついたのであろう。

しかし。

小さい時から、俺が友達を家に呼ぼうとすると「あいつのここが駄目」「そいつは下心があるから家には招待出来ない」と拒否ってばかりだったのに、何故内藤ならOKなのだ？

北斗の考える事は良く判らん。

俺はゆっくりと風呂から出た。

鏡を見る。弱々しい身体。背も内藤よりは低いので、この顔が余計にその弱々しさを浮き上がらせる。せめて兄貴達ほどの身長があればいいのに。

はあ…。

俺はまたため息をついてタオルで身体を拭いて、パジャマに着替える。

明日は学校休みみたいな。

歯を磨き鏡の中に、北斗を見つける。

「お前のせいだぞ」

だけど当然ながら、鏡の中の北斗は俺を睨みつけるだけ。何も語ってはこない。

そういえば。俺のクラスで不審な気配を感じた事はまだ誰にも言っていない。後で北斗に言っておこう、そう思った。

「不審な気配？」

「そう、俺のクラスで感じた。一瞬だったけど」

「そうか…お前がそう感じたのなら、きっとそうだろう。後で、おじい様に言っておくよ」

朝食の時、俺はこの間感じた気配の事を北斗に話した。

するとうなずきながらそう答えている。

「でも、俺の勘違いかもしれないよ？」

「それはありえない。お前は鋭いからな」

トーストを食べながら、確信に満ちた返事だ。あの気配を思い出すと、今でも神経が逆立つ。

念のために俺も毎日のように気配を探しているけど、あれ以来一つも感じないのだ。

気をしっかり持つのは当たり前だが、間違いだったらどうする？

「私もその気配を探すようにしよう。食べたら行くぞ」  
はいはい。

俺達は朝食を食べ終わると、行く準備をし、学校へ向かった。

商店街を抜け、横断歩道で信号待ちをしていると、内藤がやってきた。

「おはよう、北斗さん、南」

呼び捨てなんだけど、俺は昨日の事を思い出し顔を赤らめてしまい、下をうつむきながら「おはよう…」と返事をした。

北斗は相変わらず内藤に対しては笑顔で答える。

「おはよう、内藤君。昨日は南と上手くいったみたいで良かったわ。

この子こう見えても奥手だから、これからも押しでいくといいわよ」

「そうですね」

本人が居る手前でそんな会話を繰り返している。

ちよっと待った。なんでこうもおおっぴらにこんな事を言っているんだ？

俺の人權が…プライドが…。

信号が変わって、俺達は横断歩道を渡り始めた。

歩道の途中で、内藤が立ち止まった。何をやっているんだ？

その様子に北斗も立ち止まり、内藤を振り返りながら「どうしたの？」と聞いている。

「あれ？おかしいな…何故か足が重くなつて…」

俺はその時、再びこの間の気配を感じ、辺りを見渡す。

「南、もしかして…」

俺はうなずき、内藤を解放するべく言霊を発した。

「解かい！」

すると、呪縛が解けたのか、内藤はよろよると、こちらへやってくる。信号が変わって一斉に車が走り出す。もしあのままだったら内藤は車に轢かれていただろう。

俺は北斗に耳打ちした。

「気配を感じたか？」

「少し北斗は首を横に振り、

「何も感じなかった。もしかして例の？」

「うん、気配を感じた」

「そうか…。無差別なのか、内藤君を狙ったのか…。お前、しばらく内藤君を家まで送って行け」

「はあ？何で？」

だが北斗は内藤に対して、

「大丈夫？この間の事故にあいそうになった時の事を思い出したのかも知れないわね。幸い南が内藤君を家まで送って行きたいって言うていたわ。だから安心して」

などと勝手に言っている。

「南、本当かい？」

そんな爽やかな笑顔を向けないでくれ…。

俺は渋々うなずくしかなかった。

「ありがとう」

これで何度目なんだろう？俺の心臓が高鳴りっぱなしだ。

まさか今更拒否する事も出来ない。一度北斗がそう言ったらお終い

なのだ。

逆らう事は出来ない。

「おい南」

北斗が何かを言ってくる。

なんだよ。まだ言いたい事があるのか？

「多少遅くなっても構わないからな。これを機に、更に仲良くやっ  
とけ」

…俺はもはや言葉を失ってしまった。

ど…何処の家庭に同性愛を推奨する家庭があるんだよ！

俺の顔色は真っ赤を通しこし、真っ青になってしまっていた…。

そんな俺の様子には気づかず、二人は談笑しながら先へと進む。

俺はその二人を見ながら、何度目かのため息をついた。

「おい、内藤帰ろうぜ」

放課後、俺は内藤に声をかけた。

「ああ、ちよつと待って」

そう答えながら、内藤は教科書やノートを鞆の中に入れていく。几帳面なやつだな。

「お待たせ。じゃあ行こう」

一緒に学校を出る。すると、北斗が顔をしかめて門で立っていた。

「北斗、お前も一緒に帰るのか？」

すると北斗は「内藤君、ちよつと待ってね」内藤に笑顔を向けつつ俺を内藤には聞こえない場所まで連れて行き、

「お前の勘は正しかった。どうやら闇食いはこの学校の誰かに憑依しているらしい」

その言葉に驚くと、

「おじい様とメールのやり取りをしていたらな、そんな返事が返ってきた。まだ小さいらしいがな、お前は内藤君を守れ」

言うだけ言ったら俺を解放して、

「内藤君、お待たせ。それじゃあさようなら」

北斗は校舎内に戻って行った。

俺は呆然としてしまった。多分今から北斗は校舎内を探るつもりだろう。

手伝いたかったが、今の俺の役目は内藤を無事に送り届ける事らしい。北斗の目がそう語っていた。

仕方ない。

「内藤帰ろう」

俺は内藤に声をかけて、帰り道を歩いた。

「北斗さん。なんて？」

「いや、たいした事じゃないよ。ただ、ちゃんと内藤を送り届ける、だつてさ」

「ふうん」

内藤はなにが面白いのか、口が笑っている。

「何が面白いんだよ？」

「いやね、やつぱり南の姉さんは、君を守りたくて仕方がないみたい」

どこがだよ！

あんな優しさの欠片も見せないあいつの何処が？

反論してやりたかったが、あえて黙っていた。そういえば思い当たるエピソードを思い出したからだ。

俺達が小学生の時。私服の学校だったので、俺と北斗が帰宅途中に（本当は駄目だけど）一緒に公園で遊んでいる時に変質者が現れた。そいつは股間にある男なら必ず付いている「あれ」を俺に見せびらかしながら俺に近寄ってくる。そそり立った「あれ」を俺に近寄せてきていて、俺がポカンとしていると北斗が半泣きになりながら当時はまだまだ未熟だった言霊を駆使し、その変質者を捕らえて、警察に突き出したのだ。

その後警察の人に自宅まで送られる最中、北斗は俺の手を握りながらずっつと泣いていた。

北斗の泣き声を聞いたのは、あれが最後だ。それ以来俺を守らなきゃいけない、と意識が働いたのだろう。上から目線だが、影で人間関係や何やら何やら、色々気を使ってくれているのだ。

…認めたくはないけど…。

その北斗が珍しく、今回の俺達を応援してくれている。感謝しなきゃ。

俺達は商店街前の横断歩道まで来た。

「ここまででいいよ。ありがとう」

と言う内藤に対し、俺は、

「駄目だよ。北斗には家まで送るように言われているんだから」

そう俺が答えると、

「判ったよ、こっちだよ」

と商店街には入らずに、その前を通過し、そのまま歩きだす。

この辺は最近マンションがやたらと建って賑やかになっている。その中の一マンションを指差し、

「あれが、俺が住むマンションだ」と言って、俺を促す。

内藤の部屋は302号室。エレベーターは使わずに階段で上っていく。

「ここだよ。コーヒーでも入れるから、飲んでいって」

俺を中へ先に入るようにし、内藤は後から入る。

それ程ごちゃごちゃしておらず、すっきりと整頓されてある内藤の部屋。

「今コーヒーを入れるから。それとも紅茶の方が良いかな？」

と聞いてくるので、俺は思わず

「アールグレイのストレートで！」

と叫んでしまった。内藤は苦笑しつつ「判ったよ」と台所に向かって行ってしまった。

ここが内藤の部屋か…。

俺は勝手に立ち上がり、色々と見て回る。

勉強机の上には写真立が一つ。おそらく亡くなったという母親と、

父親と、まだあどけなく微笑んだ内藤とのスリーショット。  
どちらかというと、母親の方に似ている。

本棚には俺が読まなさそうな文庫本がいくつか。

俺は自然に内藤のベッドに腰掛け、横になった。内藤の匂いがする

…。  
「深<sup>しん</sup>…」

自然に俺は内藤の事を探った。でも出てくるのは内藤の泣き声だけ。  
おそらく母親の事を思い出し、泣いているのである。俺の方が切  
なくなってくる哀しみが、この胸を貫く。

「ごめん、アールグレイは無かったけど、紅茶…」

内藤の声が聞こえない位、俺はその哀しみを浴びていた。

「南…」

内藤が俺に近づいてきて、優しく、俺にキスをしてくる。

俺はそれでようやく内藤が部屋に戻ってきたのに気が付いたが、起  
き上がるうにも身体を押さえつけられているので、起き上がれない。

「…せつかく、今日は手を出さないように決意していたのに…」

内藤の声が、遠くで聞こえる。

近い距離のはずなのに…何故こんなに遠くで聞こえるんだ？

「俺のこの気持ち、どうしてくれる？」

内藤が優しく、俺の制服のボタンを外してくる。

服をはだけ、俺の身体のうちここにキスをしてくる。

「な、内藤…」

俺は辛うじて、思っていた事を口にする。

「何？」

内藤は、自分で制服を脱ぎ、俺に覆い被さって、今度は俺のズボン  
のベルトを外しにかかる。

「内藤ってさ…こういうのに慣れてる…？」

するとその言葉を一笑し、

「これから慣れていくんだ…。今の俺はガチガチだよ…」

何故かその言葉に安心し、俺は目を瞑る。なら、いいや…。

「俺は、内藤は遊び人だと思っていたよ……」  
全部の衣服を脱がされ、ぽつりとつぶやく。

「俺は逆に、伝授してもらおうと思っていたのだけどね……」  
俺は経験者じゃないよ、そう言いかけた口を、内藤の口で塞がれる。  
閉じた口を、無理やり挿入してくるかのような舌の動き。  
…どうしたらいいんだ？

でも俺の身体がそれを拒否しては駄目だ、と訴えている。  
口を開け、内藤の侵入を許す。

内藤の舌が俺の中ではいずり回っている。それに応えるかのように、  
俺の舌が勝手に動く。  
好きだ…。

俺の舌が、そう叫んでいる。

そして俺の手が、内藤の入るべき場所へ導く。

「南、好きだよ」

その言葉と同時に、内藤のモノが俺の中に入ってくる。  
こんなに息が詰まる感じなのに、内藤の想いを感じるのは何故だろ  
う？

内藤が出入りする。俺は自然に声を出す。

「南……」

「…何？」

いつもの声ではなく、少し上擦っている。

「こんな気持ちになったのは初めてだよ。好きだ……」

それがスイッチかのように、俺の全神経が一点に集中する。

苦しい…。

でも気持ちいい…。

「俺も……」

「俺も？」

認めたくはないけど。

「俺も好きだ。初めて会った時から……」

その声が聞こえたのか、内藤が止まって、俺を抱きしめる。

「嬉しいよ…」

この先、一体どうなるんだろう？

俺の身体はすっかり内藤を受け入れてしまっている。

再び内藤が動く。

俺の声が漏れる。

内藤は優しい。少しでも苦痛を与えないようにしてくれている。

でも、俺は乱れまくっている。

早く。

何が早くなのかは判らないけど、早く、早くとつぶやいている。

もしかして本当の内藤は悪いやつで、その毒牙にかかってしまった

んじゃないのだろうか？

考えたくはないけど、そんな思考が頭をよぎる。

でもそれなら北斗が守ってくれるはずだし…。

「…やっぱり、君は可愛いよ…南」

「俺の…どこが可愛い？」

駄目だ。やっぱり上手く声が出ない。

「普段も…だけど、こうして俺に抱かれている姿も可愛い…」

こんなに情けない声を出しているのに？

しかし、止めようとした声は止まらず、俺の口から出まくっている。

「南…」

「な、に？」

「もう…限界…」

そう言つと、内藤は俺の中で果ててしまった。

おれはどうして良いのか判らず、とりあえず、内藤にキスをした。

内藤はそれに応えながら、俺の中から出て行く。

「あ…」

その瞬間、また感じてしまった。内藤はその様子を見、微笑む。

「南、可愛いよ」

だから、俺の何処がそんなに可愛いのだ？

こんな暴れ馬な俺なのに、何故か内藤に対しては従順だ。

どうなつてしまったのだ？俺は…。

「出来れば、俺の事は寛、と呼んで欲しいな」

「寛…」

その名をつぶやき、俺は一気に全身が真っ赤になつてしまった。

昨日キスしただけでもあんな状態だったのに、こんな行為をした後どんな顔をして家に帰ればいいんだよ？

内藤は俺にティッシュを寄こし、

「本当はシャワーを浴びていつてほしいんだけど、そうしたら一発でばれるだろう？だからそれで我慢して」

それで俺は再び先程の行為がどんな意味を持つのか思い出してしまつた。

（多少遅くなつても構わないからな）

北斗の声が蘇る。あいつ、判つていて…？

俺はティッシュで身体を拭き、制服を着た。う、今になつて痛みがやつてきた…。

その痛みがこれを現実だと訴えている。

「紅茶、冷めてしまつたけど…」

私服に着替えた寛…やつぱり恥ずかしい。内藤はコーヒーを飲んでる。

やつぱり慣れている。俺は不安になつてきた。

「内藤、お前…やつぱり慣れている」

ぼつりとつぶやくと、内藤は笑いながら、

「いつもこんな様子だから誤解されちゃうけど、俺は初めてだったんだよ。いつも家事手伝いをやってきていたから、誰かと付き合う暇なんて無かつたし、彼女持つに見られちゃう。でも同性を好きになるとは思わなかつた」

「そうなのか…」

まあ、俺も似たような感じだ。逆に俺は何故か同性からモテる方が多かつたけど…。

冷めた紅茶を一口飲んだ。あ、そうだ。

「内藤、ちよつと目を瞑っでいて」

「ん？判った」

内藤は座り込んだまま、言われる通りに目を瞑った。俺はその内藤の全てを心の中で思い浮かべながら、両手の人差し指と中指をクロアさせて、

「守まもり！」

と唱えた。いつもよりかはその言霊がパワーを帯びているのが判る。

「もういいぞ」

内藤はゆっくりと目を開ける。そして不思議そうに、

「なんだか強いモノに守られているみたいだ」

そりゃそうだ。普段のつぶやくだけよりも、指を加えただけで効果は違ってくる。

ましてや俺達は交じり合った後。効果は更にかかる。

これで今日一日は大丈夫だろう。

「南、ちよつと…」

内藤が俺の腕を取って、抱きしめる。

うおおいっ！俺はまた真っ赤になってしまった。

「好きになった相手が君で良かったよ…」

そう言って、再び俺にキスしてくる。

あ、やっぱり駄目だ…。

俺は、落ちてしまった。

内藤寛、という深い穴に…。

その後帰宅したら、北斗はまだ帰っていないくて、俺は心配になって再び学校へと向かった。

「北斗のやつ、一体何をやっているんだ？」

つぶやきながら、北斗の気配を探す。

一年生のクラスから気配がするので行ってみた。すると…。

「北斗！」

北斗が廊下で倒れている。

「北斗、大丈夫か？」

抱き起こすと、北斗はうつすらと目を開け、

「やっぱりいたよ。闇食いが。残留思念にやられた。気をつける。

敵はどんどん大きくなっていくぞ。これでは宿主の命も危ない…」

「黙っている、今助けるから…」

俺は北斗に向けて術を発した。「癒<sup>ゆ</sup>！」すると少し良くなったのか、

北斗は立ち上がった。

「ありがとう」

滅多に言わない台詞を吐くと、俺のクラスの前に行き、

「ここから気配がする。お前のクラスだ。何か心当たりでも？」

心当たりと言っても…。

「内藤が転入してきただろ？それと平野が最近俺にちよつかいかけなくなっている」

「内藤君は大丈夫だ。私達の家の中に入れたのだろうか？あの屋敷には強力な結界が張ってある。闇食いは入れない。だとしたら後者の可能性が高いな」

何か考え事をしているみたいだ。

「私の勘なのだが…。内藤君は『共鳴者』ではなかるうか？」

「共鳴者？それって…」

共鳴者。それは俺達言霊使いの影のように仕えていて、滅多に現れる事は無い。しかも一度言霊使いが共鳴するとその力は何倍も伸びるらしい。俺が知っている共鳴者はばーちゃんだけだ。

「そう、私達の力に共鳴し、最大限に力を増幅させ、闇食いを滅する存在だ。だからお前を内藤君と近づけさせた。どうやらそれが成功したみたいだな」

北斗は唐突に俺のカッターシャツの首元を指差し、

「キスマークが付いているぞ。少しは隠せ」

げ！俺はその言葉に慌てふためいた。つまり、何をしていたのかば

れた、という事だ。

「ごうも私の思惑通りに動くとはな。単純なやつだ」  
笑っているが、目は真剣だ。

「とにかく、残留思念だけでも消しておくぞ」

その言葉に俺はうなずき、クラスの出入り口の前を北斗が、後ろの出入り口を俺が立って、クラスの中に対して指をクロスさせ、集中する。

北斗の気配が近くに感じる。

そして、二人同時に発した。

「浄じやう！」

すると漂っていた気配は一瞬で消え去り、クラス中が温かいモノに包まれた。

北斗がやってきて、

「お前、一段と力が増したな」

それだけ言うと「帰るぞ」と言って俺を促して学校を出た。しかし、あくまで一時的な物。闇食いはまだ誰かの中に潜んでいる。それを見つけて退治しないと…。

明日は注意して平野の行動を見ておこう…。

それよりも。

このばれてしまったキスマークは一体どうしたらいいのだ？

北斗は平然としているし…。

今日帰ったらまた修行だな。

北斗が無事だったのは幸いだけど、その後の事を考えると、ため息をつかざるをえない。

しかし内藤が『共鳴者』だったただなんて…。

内藤を連れて戦うのは気が引ける。

じいちゃんに詳しく聞いてみよう。たまによろけている北斗を支えるようにして、俺達は帰宅した。

家に着くと、北斗はさっさと部屋に籠ってしまった。

やられた事もあるのだろうが、俺の力を借りたのが屈辱だったのだ

ろう。

俺はじいちゃんを探した。

じいちゃんは中庭で、植えられた野菜に水をあげている。

「じいちゃん」

俺はじいちゃんに声をかけた。

「なんじゃ？南」

「ちよつと聞きたいんだけど…」

俺はじいちゃんに近づいて聞いてみた。

「共鳴者って具体的にどんな存在？」

「共鳴者か…懐かしいのう。ばあさんも共鳴者だったからのう」

どこか懐かしげな声で、ばあちゃんを思い出しているのだろうか、空を眺めている。

ばあちゃんはまだ生きているが、足が少し悪いので日頃滅多に部屋から出ない。

「で、具体的にはどういう役割？」

いつまでも話が進まないので再度、聞いてみた。

「共鳴者とは、一人の言霊使いにただ一人だけ、存在する。つまり

ワシらみたいに赤い糸で結ばれているんじゃないのう。かっかっか」

はいはい、のろけは判ったから。

「ただ、その場に居るだけでは何の役にも立たない。結ばれる事。

それが言霊使いをパワーアップさせる。しかも、共鳴者自身も言霊

使いのようにその威力を発揮させる。だから共鳴者は出会えたらラ

ッキーと考えた方が良く。普通は異性で存在するが、稀に同性者が

存在する。それもまた時代かのう」

俺は今日、内藤と結ばれたばかりなのだ。という事は…。

俺達の行為は無駄じゃなかったのだ。

俺はじいちゃんにお礼を言っつて自分の部屋に戻った。

でも何故、内藤は北斗ではなく俺の共鳴者なんだろう？やっぱり性

別が別だったのではないか？

身体が疼く。まだ内藤に抱かれているような錯覚に陥る。

ふと、気になって洗面所の鏡を見に行く。

「げー！」

マジでキスマークが目立つ所についている。俺はその部分に指を当て、

「消しめ！」

キスマークが消え去り、普通の肌色に戻る。しかしいつの間につけたんだ？思い出し、俺は真っ赤になる。

明日、どうしたらいいんだよ…。

俺は部屋に戻り、一人瞑想に耽った。

感じる。力が今にも開放してくれ、と悲鳴をあげている。

それをコントロールし、落ち着かせる。

意識は学校へと飛んでいった。

俺のクラスは浄化が上手くいったのか、先程の残留思念は感じない。でもやはり、俺のクラスの誰かが宿主と化した事は感じる。

誰だ？一体…。

これは、明日調べる必要があるな。

「北斗、南、ご飯よ」

との母さんの言葉に俺は食卓に向かった。

「あ、北斗は？」

母さんが心配そうにつぶやく。

「ちよっと、様子を見てくるわ」

そっぴい残して、母さんは北斗の部屋に行ってしまった。

今日は珍しく東吾兄ちゃんと、西伊兄ちゃんもいる。

東吾兄ちゃんは大学の三年生で、西伊兄ちゃんは大学一年生だ。男らしい東吾兄ちゃんと違い、西伊兄ちゃんは何処か繊細で、色っぽ

い。いや、男の俺が言うのもなんだが、つまり、そっぴい。

「南、共鳴者を見つけたな？」

東吾兄ちゃんがそう言ってくる。

「何で判ったの？」

不思議に思つて聞く。すると兄ちゃんは、

「気の大きさがいつもと違う。共鳴者を見つけた証拠だ」

「そういう物なのか…」

俺がつぶやいていると、母さんが北斗を連れて戻ってきた。

北斗は着替えを済ませ、少しうつむいている。やはり、残留思念にやられたのが屈辱だったのだろう。泣いていたのか、目が少し赤い。

「さあ、食べましょうか」

母さんは明るく言つて、東吾兄ちゃんから順番にご飯を渡している。俺は最後だ。

「いただきます」

北斗の様子を見ていたが、小さく「いただきます…」と言つただけで、箸すら持とうとはしない。

「北斗、大丈夫か？」

俺は聞いてみたが、返事はなく、その代わりに俺を見てため息をつく。

「北斗は寂しいんだよ。南が遠くへ行ったみたいだ」

西伊兄ちゃんがそう言つと、

「そ、そんな事はありません」

と、箸を持ち、食べ始める。寂しい？北斗が？

やっぱり内心では内藤の事が好きだったのだろうか…。

俺の胸が北斗の寂しさを感じ取っている。

「そ、それよりも。南、明日は闇食いの宿主を探すぞ」

いつもの口調に戻り、俺は安心した。

やっぱり北斗はこうでないか…。

宿主探し。明日の為にゆっくり休まないか。俺は「ごちそうさま」と言つて、自分の部屋へ戻った。

怪しい人物は平野だよな、やっぱり。

いや、決め付けは厳禁。その一瞬の判断が油断の元だ。

一刻も早く宿主を探さないと。俺は再び瞑想した。

「おはよう」

「お、おはよう」

「おはようございます」

本日は雨。気が滅入りそうな天気だったが、傘を差して歩いていると、いつもの交差点で内藤と出会う。

俺は昨日の事を思い出し、視線を背けていると、北斗はいつもの様子で内藤と話している。

こいつ、俺と内藤との事を見て、何も思わないのかよ。

本当に北斗の考える事は良く判らん。何故にこつも平常心でいられるのだろう？

まだ術が効いているのか、今日は内藤には何事も起こらない。

だが学校に近づくと、悪意に満ちた気配と出会う。

この間よりも大きくなっている。

「北斗…」

「ああ、判っている」

北斗はうなずき、俺達と一緒にクラスまでついてくる。

もう、気配を消すのは止めたのだろう、悪意は段々強くなっている。

その気配が一気に俺達に攻撃してくる。

「避—」

「守—」

俺と北斗は咄嗟に言霊を使った。内藤の身体が心なしか輝いている。

「やはりな。内藤君はお前の共鳴者だ」

北斗がつぶやくと、今度は攻撃態勢に入る。

クラスの中で不適な笑みを浮かべているのは平野だった。

「平野を宿主としたのか。でも安心しろ。お前を滅して身体を取り

戻す」

内藤は何が起きているのか判らない様子で、

「何事だ？」

と、少しうろたえている。

他のクラスメイトは時が止まってしまったかのように、身動き一つ

しない。

その中で平野だけが、浮かび上がっている。

『せっかく久々に手に入れた身体なのだ。そう簡単には返さない』  
平野の口を借りた闇食いが邪悪な声で叫んでいる。

「内藤、俺につかまれ！」

俺はそう言い放ち、内藤を背後にやる。

『そいつか、この身体が憎んでいる存在は。全く単純な思考だな』

「黙れ…黙れ！」

俺がそう言つと、内藤がその言霊を強化させて、闇食いに襲い掛かる。

「…………！」

どうやら効果があつたらしい。闇食いは黙ってしまった。

北斗は昨日の恨みを晴らしたいのか、必死で言霊を使い続ける。

「臨！」

そう発したら、平野の身体から変な液体のような物が現れた。

「切！」

その液体と平野を切り離す。

「縛！」

逃げられないように液体を縛りつける。

「何をやっている。お前も手伝え…浄！」

「言われなくてもやっているよ。目！」

俺は平野の身体を見た。まだ少し残っている。

それより先にこいつをやっつけないと。

「浄！」

「浄！」

俺達は二人がかりで浄化にかかった。

幸い内藤が共鳴してくれたおかげで、力が増幅している。  
闇食いの実体がどんどん歪んでくる。

「最後行くぞ」

「うん」俺はうなずき、北斗と同じく指をクロスさせ、

「滅！」

と、同時に放った。

一瞬間食いが小さくなったかと思うと、その身体が散って天に帰っていった。

「後は残ったこいつか…」

北斗が平野の背中に手を当て、

「浄！」

と言うと、平野の中に残っていた闇食いの一部が木っ端微塵になって消滅してしまった。

先程の緊張感が無くなり、止まっていたクラスメイトが動き出す。

平野はその場に崩れ落ちた。

誰かが「平野、どうした？おい、意識がないぞ！誰か先生を呼んで来い！」と言っている。

北斗はため息をつき、自分のクラスに行こうとすると、内藤が、

「一体、さっきのは何だったんです？」

と、聞いている。

俺と北斗は目を合わせ、うなずくと、

「詳しく話すから、学校が終わったら家まで来て欲しい」

その言葉に内藤はうなずいた。

さて、どう話せばいいのだろうか？

でも話を聞いたらきくと内藤は俺から離れてしまっただろうな…。  
だって普通じゃないからな。

せつかく結ばれたと思ったのに、なんで内藤が共鳴者なんだよ。

俺は、自分の運の無さに涙が出そうになった。

一人、感傷に浸っているうちに、放課後になった。

内藤と二人でクラスを出ると、廊下で北斗が待っていた。

「さあ、行こうか」

北斗の後について、俺達三人は我が家へ帰るように一緒に商店街を

抜けて、屋敷に着いた。

「内藤君はここで待っていて。今おじい様を呼んでくるから」  
応接間に二人で待っていると、じきにじいちゃんと北斗がやってきた。

「ほう、おぬしが南の共鳴者か」

じいちゃんはそう言うと、内藤をじろじろと見た。

「男前じゃのう。まるで昔のワシみたいじゃ。かっかっか」

豪快に笑ったかと思うと、真面目な顔になり、

「聞きたい事を聞こうか。言うてみよ」

「はい…ええと、何から聞けばいいのかな…」

迷っているみたいだが、内藤は意を決意して、じいちゃんに向き直り、

「あの、平野君がああなったのは何故です？」

と聞いている。じいちゃんは真面目な顔のまま内藤を見つめ、

「聞いたら後戻りは出来なくなるぞ。それでも良いのか？」

「ちらり、と内藤は俺を見、

「はい、構いません」

と言いつつた。

その様子に満足したのか、じいちゃんはぼつり、ぼつりと話した。

「この世界には『闇食い』という存在がおってな、人間に寄生し、その人間を操り願いを叶える代わりに命を奪うという悪質な生き物なのじゃ。そして我が四季家は代々闇食いと戦ってきた裏社会に生きる『言霊使い』の一族でう。おぬしも見ておったであろう、北斗と南の戦いを。あれが我らの役目なのじゃ」

「言霊使い…？」

自分に言い聞かせるかのようにつぶやいた。

じいちゃんは話を続ける。

「言霊使いには『共鳴者』という存在がおってな、その言葉通りに言霊使いと共鳴し、言霊を更に強化させる者がいるのじゃ。普通は

共鳴者と言霊使いは一心同体、強く結ばれたら共鳴者の能力が発揮されるのじゃが…おぬし、南とねんごろになつたな？」

わー！そういう事は言うのやめてくれっ！

俺の気持ちを他所に、内藤は真面目な顔をして、

「…はい」

と答えやがった。うわーっ、認めてどうするっ！

「やはりのう。同性の共鳴者は極めて稀でのう。その代わり一度共鳴すると、普通の共鳴よりも能力は数倍も上がるとか。だから今回の闇食いも滅する事が出来たのじゃろう。ほれ、見てみよ。北斗と南の気の大きさを。おぬしなら見えるはずじゃ」

内藤は俺と北斗を交互に見、ため息をついた。

「はい、見えました…。でもこれはどうして？」

「いかに相手を愛でるかによって変わってくる。…南が好きか？」

ちよ、何を聞いているんだよ、じいちゃん！

「はい、好きです」

内藤…。俺はこうまで言い切る内藤に尊敬まで感じた。

「それで良い。もしおぬしが否定したら記憶を消していたところじゃ。良かったのう、南」

じいちゃんは俺を見て、にやりと笑う。

俺は脱力しきっていた。

「しかし、東吾も西伊も北斗もまだ共鳴者を見つけていないというのに、運命とは皮肉なもんじゃのう。かっかっか」

じいちゃんは笑うと、再び内藤に向き直った。

「他に、質問はないのか？」

「は、えーと、俺…僕はこれからどうすれば良いのでしょうか？」

「仲良くやればよい」

「は？」

「今までのように、いや、今まで以上に親密になるのじゃ。そうする事によって言霊使いと共鳴者はより力を増幅できる。闇食いの気配も察知する事ができるじゃろ。出来れば闇食いは二度と現れて欲

しくはないのじゃがな」

「は、はあ…」

俺は喜んでいいのかそうでないのか迷っていた。

確かに内藤が俺に対する気持ちをはっきり言ってくれて嬉しい。しかし、それは今後また闇食いが現れたら、その危険な戦いに巻き込んでしまう事を意味している。

そんな事…俺には出来ない。

「内藤、危険なんだぞ？」

俺は内藤に言った。

「ああ、判っている…」

「それでもいいのか？」

「覚悟は出来ている」

「内藤…」

「いちやつくなら、部屋でやれ」

北斗が冷静な一言を投げてる。

…それもそうだ。

「他に話は無いのじゃな？それではワシはばあさんのもとへ行くでしょう。久々にワシも若い気持ちになっただわ。かっかっか」

じいちゃんはそう言つと、応接間を出て行った。

「私は一人で修行する。それじゃあな」

北斗も出て行ってしまった。

二人で残されて、俺が緊張していると、内藤が、

「いつまでもここに居るのも何だし、南の部屋へ行こう」

そう言つて立ち上がった。

俺の部屋に入るなり、内藤がキスしてきた。

「な、内藤…」

「良かった。これで俺は正式に認められたって訳だ」

「で、でも、本当に危険なんだぞ？」

「構わない。俺は南と共に歩んで行きたい…」

そして、更にキスをしてくる。

俺の呼吸が乱れる。

「あれ？ここにわざと見えるように、キスマークを付けた筈なんだけどなあ…」

…わざとだったのか。

俺はどうしようか迷ったが、とりあえずは内藤を家まで送っていかないで。

「内藤、送るよ」

「…そうだね。帰ろうか。ああ、アールグレイ買ったんだ。良かったら飲んでいってよ。クッキーもあるからさ」

好物を目の前に吊り下げられ、俺はついその言葉に乗った。

「自転車出すから、ちょっと待って」

俺は自転車の鍵を取り出し、商店街の中を自転車押しながら内藤を送って行った。

紅茶とクッキーって俺にとっては最強の組み合わせじゃないか。

「あのさ、内藤…」

「どうした？」

「確か、紅茶とクッキーがあるはずだよな？」

「うん、あるよ」

「だとしたらさ…なんで？」

「何が、なんで？」

「どうみても、俺、騙されてない？」

「騙された？誰に？」

「内藤に。じゃなかったら…」

「じゃなかったら？」

「どうして俺達、全裸なんだ？」

「それは、もつと親密になる為だよ」

「詐欺だ！詐欺！」

「大声出さないの」

「だって…」

それ以上俺の愚痴を聞きたくないのか、強引に唇を塞ぐ。

そう、ここは内藤の家。俺は餌に釣られてしまった。ものの見事に。

俺のプライドが…。

でも内藤の愛撫に感じてしまっている自分がいる。

恥ずかしい。

結構内藤ってしたたかな性格している。

中身がこんなやつと知っていたら…。…知っていても、やっぱり惚れてしまっていただろうな。認めたくはないけど。

言霊使いと共鳴者は一度出会うと、強力な磁石のように惹かれあうと聞いている。

俺と内藤のように。

じいちゃんとはあちゃんもそうだったらしい。

母さんは共鳴者とは出会わず、普通に父さんと恋に落ちて結婚したらしいが。

父さんは婿養子なのだ。

内藤が俺の両足を持ち上げ、中に入ってくる。

あっ！駄目だ…。

俺の意識が朦朧となるが、繋がった部分だけは強烈に俺に目を覚ませ！と言ってくる。

その圧迫感に自然に声が漏れる。

「南…」

「な、内藤…」

すると動きが激しくなって、俺はますます乱れた。

「寛って呼んでってば、ひろし」

「ひ、寛…」

「うん、それでいいよ」

内藤、いや寛の動きが優しくなる。

「昨日は俺だけがイッたからね、今日は南にもイッて欲しい」

そう言うと、俺のを擦るかのように身体を密着させて動いている。  
あ、駄目だ。そんな風に動かれたら…。

「ない…とう…」

「…寛だつてば…」

「寛…も、もう、駄目…」

俺は限界がきて、恥ずかしい事に先にイッてしまった。

「…元気だね」

その言葉に俺は真っ赤になってしまった。その顔を見た寛が嬉しそうに、

「可愛いよ…」と言って俺を攻め立てる。

この俺の何処が可愛いんだよ？初めて会った時から寛は（…やっぱり言いにくい。もう内藤のままでもいいや！）俺の事を可愛い、と言ってくる。

「そろそろ…俺もイクよ…」

すると動きが急激になって、寛が俺の中で放出される。  
吐息が漏れる。

「…さて、紅茶でも入れようか。でもその前にシャワーだね。もう隠す必要は無いからね」

爽やかな笑みを浮かべ、俺から離れる。

…駄目だ。やっぱり俺は内藤が好きだ。

こんなに人を好きになる事ってできるんだ。

…なんか、悔しい。

シャワーを浴びると俺達は身体を拭き、部屋に戻った。服を着ようと思っていたら、また付いているキスマークに気づいた。

「まさか、また見える場所に付けていないよね？」

「さあ、どうかな？」

意味深な笑みを浮かべたまま、服を着だす。…まあ付いていても消すだけだから。

「とにかく紅茶とクッキー。俺その為に来たんだからな」

「判っているよ」

内藤は苦笑しつつ、お湯を沸かしている。

その時、俺はまた妙な気配を感じた。

それは内藤も同じだったみたいだ。俺達は顔を見合わせ、辺りを探った。

「深！」

今までとは違う、確実にパワーアップした言霊。それが一つの気配を察知した。

この近辺にいる！

俺が外に出ると、内藤もついてきた。

「内藤は中にいる」

「そういう訳にもいかない」

俺達はエレベーターを使わずに階段で一階まで降りた。気配が遠ざかっていく…。

「逃げられたか」

「そのようだね」

しかし…共鳴するところまで違うのか。俺は自分に起こった異変に改めて気づく。

けれども嬉しい事ばかりではない。闇食いが多発している事に俺の心は不安で満たされる。

俺は内藤が巻き込まれないよう、結界を張る事にした。

「結！」

これで、この辺の区域は大丈夫のはずだ。俺達は内藤の部屋に戻った。

「疲れた。内藤、紅茶まだ？」

「だから寛だって、何回言わせるの？…まあいいけど。今準備しているからもう少し待って」

結界を張るのにだいぶ力を使ったから、俺はへとへとになっていた。今までだったらここまでの力は出せなかっただろう。今まで何故北斗やじいちゃんが俺に修行させようとしていたのか少し判った気がした。

「南」

「ん？何？」

俺が振り向くと、内藤がキスしてきた。

「な、何だよ、急に」

俺は真っ赤になりながら、立ち上がった。

「そうやって真剣な顔もいい。でも、たまには息抜きが必要だよ」  
それとキスがどんな関係なのだ？

どう見ても、俺、内藤に遊ばれてない？

俺の思考を置いて、内藤は「紅茶の用意ができたよ」と言っ  
て目の前に置く。

俺はお茶っ葉がジャンピングしているポットを眺めながら、やっぱ  
り内藤って良い旦那さんになれるな、と考えていた。

温めたティーカップの中のお湯を捨て、ちようどいい頃合になった  
紅茶を注ぐ。

ちようど二杯分。あれ？でも内藤って…。

「コーヒー派じゃなかったか？」

思わず聞いた。すると内藤は静かに、

「どちらも好きだよ。ただ近所にはコーヒーショップがあるから、  
それを使用していただけ。アールグレイならやっぱりストレートが  
一番だね」

意外と詳しい。

「内藤って、良い旦那さんになれるな…」

思いが口から出てしまった。

「じゃあ、お嫁さんは南だね」

またそんな事を言う。俺は真っ赤になってしまう。

「その反応は肯定と取っていいんだよね？」  
優しく微笑む。

俺はつい視線を逸らすようにぶいっと横を向く。

そんな俺の顔を両手で自分の方へ向けさせ、内藤は「そういう所も  
可愛い」と言っ  
て俺にキスをする。

「……………」

俺は、言葉も出なかった。

ただ、そのキスがとても優しくて。

俺も同じように内藤の顔を掴み、キスをして、舌を絡めさせる。

「…クッキーは…」

内藤がつぶやく。

「後で、食べよう」

そう言った内藤に連れられて部屋へ入り、再び衣服を剥ぎ取られた。

…やっぱり、俺って遊ばれているような気がする…。

帰宅した俺は、神妙な面持ちのじーちゃんを目の前にし、新たに感じた闇食いの気配の事を話していた。

「そうか…。やはり、封印程度じゃ効かなんだか…」

俺はその言葉に驚いた。

「全て滅したんじゃ…」

「それは事実じゃ。しかし、生まれたての闇食いをいくつか封印した。それが現れたんじゃろ…」

そんな事今言われても…。

俺は呆然とした。

「共鳴者が現れたのも、それを察知したのじゃな…」

「でも、何で俺？」

以前から疑問に思っていた事をつぶやく。

「それはおぬしが、一番適任者だったからじゃ」

そんな。そんな事を言われても。

俺はまだまだ未熟者だし。

「きつと天はおぬしの存在を見越したんじゃろ。でなかったら、おぬしの元に共鳴者が現れなかったはずじゃ」

そう言いきられても。俺が滅せよとでも？

「そうじゃ、おぬしがその役目を授かったのじゃ」

言い切られてしまった。でも俺にどうせよと？

俺はじーちゃん程言霊使いの力はないし、判断力もない。せいぜい出来るのは、闇食いを察知するだけ。

こんな俺に何が出来る？

俺が葛藤しているのを横目で見て、じいちゃんはぽつりと、

「南、おぬしには守るべき存在があるじゃろ？」

守るべき存在……じいちゃんばあちゃん、父さん母さん、兄貴達、北斗、そして内藤。クラスメイトの顔が次々と浮かぶ。

「人にはそれぞれ役目があるのじゃ。不要な存在などおらぬ。それが例え凶悪犯でもじゃ。人殺しだからと死刑にしてしまったらそれで気持ちが治まるか？必ずしもそうとは限らんじゃろ？中には一生その苦しみを抱えて己がやった行為に真つ向からぶつかって欲しいと思う人もいるはず。ワシらの役目は何じゃ？ワシらが出来る事といえば闇食いを察知し、浄化し、人々を守る事じゃ。それが誰からも評価を受けなくても。それがワシら言霊使いの役目じゃ。南、おぬしが今思い浮かべた人々の為にも立ち上がらねばならぬ。その意味は判るじゃろ？」

俺は、うなずいた。

「全てをゼロに戻せとは思っておらぬ。初めは小さい事から始めた方がいいのじゃ。幸い、おぬしにはその力がある。後ろを振り向かずの前に進んでみよ。きっと答えは見えてくるはずじゃ」

俺は、じいちゃんの言葉一つ一つをかみ締めていた。

俺の役目。おぼろげながら、少し見えてきた。

「じいちゃん、いや、おじい様、ありがとうございます」

俺は深々と頭を下げた。じいちゃんはそんな俺を笑いながら見つめ、「ゆくのじゃ、南。皆がおぬしを待っており。おぬしにはその力がある」

そう言つと、去っていった。

俺が生きている意味。存在意義。

否定してはいけない。受け入れなければ。俺は立ち上がった。

ようし、とことんまでやってやるつもりじゃないか。  
初めて、俺は言霊使いとしての使命を果たそうと考えていた。

「北斗、起きろよ」

俺は初めて北斗より先に起き、まだ部屋で寝ている北斗を起こした。

「…まだ早い」

再び寝かけた北斗の布団を剥ぎ、

「今から二人で実戦をしよう」

そう言つと、北斗の身体がピクリと動き、

「実戦？よかるう、相手になつてやる」

俺は起き上がった北斗に向かって、

「先に道場で待っているから」

と言ひ残し、道場へ向かつた。

闇食いの存在が耳の奥でざわめく。しかし、それに釣られてはいけない。道着に身を包んだ俺は一人瞑想をしていた。

「待たせたな」

道着を着た北斗が現れる。

「いや、そんなに待っていないよ。いつ始める？」

北斗は壁にかかっている時計を眺め、

「そうだな。あの秒針がゼロになったら」

「OK」

二人で秒針を見つめる。

五秒前…

四、三、二、一…。

「停！」

即効で北斗が打つて出る。俺は「守！」と叫んで守つた。

「殺！」

北斗は本気でかかってくる。でもその程度じゃ効かない。

「生！」

そう叫んで交わした。まだまだ本気ではない。こちらはまだクロスさせてはいないのだ。

「打！」

今度はこちらから打って出た。

北斗は少しダメージを受けたみたいだったが、にやりと笑い、

「治！」

と打撃を回復させる。

「眩！」

俺は目を眩ませる。しかし北斗はそれをも「治！」と言って回復させてしまう。

俺はこれ以上長めたくなかったので、

「黙！」

と言って言霊を封じた。

すると今度は身体で攻撃してきやがった。

蹴りが来る。

「逃！」

俺はするりとかわした。

今度は合気道を使ってくる。それも「塞！」で封じる。

いよいよ北斗の手札が無くなっていく。それでも俺達は真剣に対峙した。

「停！」

突然響き渡る声に、俺たちの動きが止められる。

辛うじて動いた視線の先にいるのは、母さんだ。

いつもの微笑みはなく、真剣な表情をしている。そして、固まった

ままの俺達に近づき、一発ずつビンタしてきた。

「もう、あなた達、いいかげんになさい！」

その言葉に俺達は道場に座り込んでしまった。

北斗はポカンとしているし、俺は母さんの言霊を受けるのは初めてだったから、何故か得体の知れぬ存在と対峙しているような、そんな錯覚に陥った。

泣き出すか？と思ったが、母さんは一言、

「朝食を食べて、さっさと学校に行きなさい！」  
と、叫んだのだった。

「気がそがれた。シャワーを浴びてくる」  
そついい残し去って行った北斗を眺めながら、母さんはため息をついて、

「何故あの子はあんなに男らしいのかしら？」  
俺は我慢出来ずに笑ってしまった。

シャワーを浴びて戻ってきた北斗は、食卓に着き無言で目玉焼きを食べている。

「北斗…」

俺が声をかけると、北斗は皮肉な笑みを浮かべ、

「お前もまだまだだな。お前の攻撃は人を傷つけないやり方だ」  
思わず胸を貫かれる。

「しかし…」

北斗はまだ何かを言いかけていて、どう応えたらいいか迷っている風だった。

が、ぼつりとこぼした声は、

「これで、私の役目は終わった。…幸せになるのだぞ」  
と、意外なものだった。

いつもの登校風景。でも北斗は俺に気づかないような、そつけない態度だった。

「おはよう」

内藤がいつもの交差点で挨拶を交わしてきた。

俺は「おはよう」と挨拶を交わしたが、北斗はそつけなく「おはようございます」と言っ先に行ってしまった。

「…北斗さん、一体どうしたの？」

内藤の問いかけに俺は「判らん」と答えるしかなかった。

休み時間、俺は新たな闇食いが発生してないか、トイレに籠って探っていた。

結果は無し。

個室から出ようと思ったら、内藤がやってきて、俺はまたトイレの個室に閉じ込められてしまった。

「…何だよ」

精一杯不機嫌面をしたのに、内藤は俺にキスをして、小声で「北斗さん、一体どうしたの？」と聞いてくる。そんな事俺が知るか！

「俺だって判らないよ。あいつは本性をなかなか表さないからな。でも、確かにいつものあいづらしくない。探ってみるよ。「姉！」「」

内藤が傍にいてくれたおかげか、俺の意識は北斗へ向かっていく。

これは…。

俺は術を解いた。

「どうだった？」内藤が聞いてくる。俺は笑って、「単なるやきもち。俺が内藤に奪われた事に対し、今頃になって衝撃を受けたんだろっ」

「…え？」

俺達はトイレの個室で接近したまま、俺が蓋をした便座に座った膝の上に内藤が座り込む形で一緒に入っていた。

「そう…か。…そうだもんな」

内藤がなにやらつぶやいている。

「何が？」

俺は逆に聞いた。

「だって、君の姉さんは君の事が好きだから、そういう事もありうるな、と思っつて」

俺はその言葉に反論しようとした。

だけれど俺の言葉は全て内藤に塞がれてしまう。

「…まだ、言いたい事は？」

そう言われ、俺は何も言い返せなくなってしまった。

「うん、素直でとてもいい」

内藤は何処まで俺の事を判っているのだろうか？

北斗の事も、何処まで理解しているのだろうか？

疑問に思っただけ聞いてみたくなかったが、抑えて俺は内藤のキスを受けた。

何か、むずむずした感覚に襲われる。

「内藤：」

内藤は苦笑して、

「そんな顔で見ないでくれよ。これでも我慢しているのだから…」  
そう言いながら、口づけに舌を絡めてくる。

「これ以上は駄目。俺が我慢できなくなる」

俺から離れ、大げさに言っただけ個室の鍵を開けて、出て行ってしまった。

…残された俺は一体どうしたらいい？

あれこれ考えたが、結局は答えが出ないままトイレの個室から出てクラスへ向かった。

授業中、俺は再び探したが、何も出てこない。

平野はまだ入院中だが、意識は戻ったようで退院も間近らしい。

命が助かったただけでも良かった。あのままだと、確実に命を失っていたからだ。

新たに見つけた気配は一体何だったのだろうか？

北斗でも、内藤でも、ましてや平野も有り得ない。

新たな宿主でも見つけたか？また厄介な事になりそう…。

これ以上の厄介事はごめんだ！

俺は心の中で叫んだが、そうも言っただけいられない状況が、待ち受けていた。

下校する時、校門前に数人の男子学生が待ち受けていた。俺には関

係ないだろう、と高を括っていたら、その中の一人が確実に俺を名指ししてきた。

「えー、この中に四季南はいるか？いたら返事をしろ。もし隠していたらこの高校を潰すから、そのつもりで」

こうまで言われると、出ない訳にはいかない。しかし、俺より先に名乗り出る者が一人。

北斗だ。

「私がそうだが。何の用だ？」

ちよつと、何を考えているのだ？

ち、違う！俺が南だ！言いかけた俺を黙らすような鋭い視線。

北斗のやつ…このままじゃ危険だぞ？

俺は北斗の真意を探るべく、後を追った。

「追！」

今までとは確実に違う。精神体ごと追跡モードに入って、こつそりと北斗達の後を追う。

街を抜け、段々人通りの少ない山道を登っていく。

「まだか？」

北斗の声が聞こえる。

「もうちよつとまで」

下品な笑みを浮かべ、男子学生達が笑っている。

こいつら。俺に一体何の用だ？

「兄貴、連れてきやしたぜ」

男子学生の一人が声をかけると、兄貴、と呼ばれた一人が振り返る。あれ？この顔…何処かで見覚えある。

兄貴、と呼ばれた男子は眼鏡をかけ、気障な感じで、でもハンサムな顔を北斗に近づけ、

「やつぱりお前が来ると思っていたよ。四季<sup>しき</sup>北<sup>ほく</sup>斗」

「…！」

一杯食わされた！確かに初めから北斗を名指ししていたら、北斗はこつという行動に出なかつただろう。だが俺の名を出せばほぼ確実に

北斗が来るのを判っている。

俺は必死に記憶の底を探つて、こいつが誰か思い出そうとしていた。

「…お前は？」

北斗もその策略に気づいたんだろう、必死に気持ちを抑えながら相手を睨んでいる。

「俺は新垣誠一。覚えてないか？中学では一緒だっただろう？」

新垣！

俺は思い出した。いつもいじめられていて、その度に俺や北斗が守つていたやつだ！

「お前か。南に何の用だ？」

北斗も相手に気づき、でも警戒心は解かずに一定の距離を保っている。

新垣は眼鏡を外し、

「ちよつと言つておきたい事があってね」

不適な笑みを浮かべている。

「俺は、最近記憶をよく無くすんだ。お前、何か心当たりないか？」

意味不明な事を言ってくる。

北斗は不遜な態度で一言、

「知らん」

振り向いて帰ろうとするところを舎弟(?)達が道を塞ぎ、北斗をすんなり帰そうとしない。

俺は気づいてしまった。この新垣から闇食いの匂いがする！

俺はいつたん身体に戻り、内藤に行き場所を告げてから今度は身体ごと北斗のもとへ行った。勿論姿は消して。

幸いな事に、北斗はまだ無事だった。ただし、どれだけ暴れたのか、肩で息をしている。

北斗が危ない。俺は姿を現し叫んだ。

「北斗！」

すると笑みを浮かべ、張り詰めていた糸が切れたのか、俺に向かって倒れこんでくる。

「北斗、北斗……」

俺は新垣を睨みつけた。

「まさか、お前があら……アラワれる……トハ……」

新垣の本性というか、取り付いていた闇食いが表に表れて、俺を威嚇する。

「逸！」俺はそれを逸らした。

絶対に許さない。俺は今まで使った事の無い術を使ってみた。

「竜！」

すると、一気に空が曇りだし、雨雲が現れこの新垣の身边のみ雨を降らせる。

「臨！」

雨が止んだ後、俺が言霊を発すると、新垣の身体から、この前の平野のように液体状の何かが出てくる。

「切！」

「縛！」

ここまで手順は同じ。しかし、北斗をいじめたツケは払ってもらわないと。

俺は、指をクロスさせ、更に言霊を発した。

「砲！」

闇食いが怯えるのを感じる。

「拷！」

苦しげにうごめく。まだまだやりたかったが、内藤が現れたので、俺は内藤の手を取りしっかりと握り締め、言霊を発した。

「滅！」

すると、闇食いは散って天に帰っていった。

新垣がぐったりとうずくまり、俺は背中 hands を当て、「浄！」と唱えると、新垣はその場に倒れこんだ。

この前感じた気配と同じだった。こいつが元凶か。

新垣は放って置いて、俺は北斗を抱き上げた。

「北斗……癒！」

すると、北斗は目覚めて信じられない事に、新垣に近寄っている。そして一言。

「私の共鳴者はこいつだ…。」  
とつぶやいた。

「こんな事ってあるかよ？」

俺は怒りをあらわにし、道を歩いていく。

そんな事は信じない。信じたくない。信じられるものか！

よりによって、闇食いの宿主が北斗の共鳴者だと？

許せるはずがないじゃないか！

しかし北斗は断言した。新垣が、北斗の共鳴者だと。

そんな話があるか？

颯爽と歩いていくと、内藤に腕を掴まれ、キスをされた。

「今まで、北斗さんがブラコンだと思っていたけど、南も実はシスコンだったんだね」

俺はその言葉に怒りが倍増してしまった。

「馬鹿！」

俺は内藤から離れ、再び歩き出す。その俺を抱き止め、内藤は優しくささやく。

「怒るなよ。南には俺がついているじゃないか…。」

そうだよ。

そうだけど…。

「はあ…」

俺はため息をついた。

「それより、あの新垣の事が知りたいね」

俺の耳元でささやいてくる。

俺は再びため息をついて、話し始めた。

「新垣はね、俺達と同じ中学だったんだ。ただ普通の人より頭がいい、それだけの理由でいじめに合っていたんだ。俺と北斗はそ

れに理不尽な物を感じて、いつも庇っていた。そして高校は別々な所に通っていたんだけど、まさかああいう再登場するなんて思ってもみなかった…」

「その時は共鳴者とは気づかなかったの？」

「うん…どうやらタイミングもあるみたいだね。俺も初めて内藤と会った時、共鳴者だとは思わなかったから」

すると内藤は意味深な笑みを浮かべ、

「でも互いに一目惚れはしたよね」

…馬鹿。

俺は真っ赤になつて一刻も早く家に帰りたかった。でも北斗が心配だし、先程の場所に戻った。

北斗は新垣を膝枕するように座り込み、必死に声かけをしている。

そんな姿が見ていられなくて、俺は内藤と手を繋ぎ、「癒！」と唱えた。すると、

「うっ…ん」

と新垣が目覚めた。

「新垣、大丈夫か？」

北斗が必死になつて聞いている。

この様子は…。

「あれ…？四季さん。ここは…？」

「何も覚えてないのか？」

「ああ…何があつたんだ？うわっ。びしょ濡れじゃないか」

…しまった。俺がやつたんだ…。

俺はさりげなく「温」と唱えた。

「とりあえず、私の家に来い。風邪ひいたら大変だからな」

いつもの調子に戻った北斗の口調。だけでもさりげない心遣いが含まれている。

…面白くない。

さっき内藤から指摘されたけど、俺は自分がこんなにシスコンだとは思わなかった。

いつも北斗が居て当たり前。北斗の保護のもと生きてきたのだ。それを…。

「はあ…」

また、ため息が出てしまった。そんな俺に内藤はキスで勇気付けてくれる。

目が、「大丈夫」とささやいている。俺は何故かその言葉通り大丈夫な気がしてきた。

単純だな、俺って…。

舎弟達は放っておいて、俺達は新垣を連れて屋敷まで戻ってきた。もし屋敷に張られている結界を抜けられなかったら…。と色々考えていたのに、あっさりと通過しやがる。ますます面白くない。

北斗が新垣を連れて色々話している間、俺は内藤を自分の部屋へ入れて、入り口を封じた。

「内藤…」

俺が内藤を求めている。

「南…」

不謹慎かもしれないが、俺達は互いを求めている。それがどんな状況であるうとも。

内藤にキスをされて、強く抱きしめられて、それだけで俺の気持ちには天にまで昇りそうだ。

「もしも…」

「もしも、何？」

俺は聞くが、内藤は笑って黙ったまま。

…これはあの手でやるしかないか？

俺の指で内藤を突く。

しかしするりとかわされ俺はひっくり返ってしまふ。

そんな俺を上から見下ろし、

「こんな所を誰かに見られたら、などと考えてしまっただけ…」

そう言いながら俺にキスをしてくる。

あ、待って！それは困る！！

しかし内藤は俺を解放しようとはしない。俺はなんとか息がつまる  
思いをしながら内藤から離れた。

…もしかして、内藤は本当にサドなのかもしれない。  
俺の下半身が引きつる。

「大丈夫だよ。ここでは何もしない」

その一言に安堵する。

「北斗が気になる。行ってみよう」

俺は封を解き、じいちゃん達のもとへ向かった。

三人は神妙な顔で座っている。

「南か：おぬしたちもこっちへ来て座るがよい」

じいちゃんの言葉に、俺達も北斗達と並んで座った。

しばらくじいちゃんは黙っていたが、口を開き、

「ワシらの役目は教えた。じゃがおぬしはどうするつもりじゃ？」

もし答えがイエスならそのまま、ノーだったら記憶を消すつもりだ  
ろう。

ノーと答えてほしい。でもそうしたら今後二度と北斗には共鳴者が  
現れなくなる。それはじいちゃんも北斗も良く知っているだろう。  
そう考えたらイエスというべきなのだろうが…。

新垣はだまっただまま、答えようとはしない。おそらく自分の身に起  
きたことが衝撃的だったのだろう。

新垣の一言が、この場を決めてしまうのだ。

「つまり…」

「うむ」

「俺が北斗さんと共に戦えっ事ですよね」

「そうじゃ」

新垣はまだ考えている。

もう、どっちでもいいや。俺は北斗には幸せになって欲しい。それ  
が言霊使いではなくても。しかし北斗は言霊使いとして生きていく

のを望んでいる。

どっちに転んでも後悔するのなら、より後悔の少ない方を選んで欲しい。

「…ました」

え？

「判りました。俺は今まで北斗さんや南君に力を貸して貰ってました。その恩返しになるのなら、喜んで力をお貸しします」

「よし、よからう」

じいちゃんは満足げに笑っている。北斗も泣いていいのか笑っているのか、微妙な顔だ。

終わった。これで俺の役目は完全に終わってしまった。

がつくり肩を下ろした俺に対し、北斗は笑い、

「これでまたお前を守る事ができるな」

意外な事を言ってきた。

へ？

俺？

「私は己の弱さに腹が立っていてな、このまま無力で生きたくはなかった。でもこれで対等だ。南、安心しろ」

北斗…。お前そこまでして……。

新垣は闇食いに宿主として使われていた割には元気そうだ。やはり共鳴者だからか？

「新垣とか言ったのう」

「はい」

新垣は返事をする。

「北斗には今は手出ししてはならんぞ」

「は？」

うわ、なんて事言っただ。それはつまり…そういう意味だろ？

「おぬしが北斗と結婚したくなってからじゃ。だが一緒に修行はせにゃならん。…毎日ここに通うがよい」

新垣はポカンとしていたが、意味に気づいて赤面している。

そつだ。北斗に手を出すんじゃないよ！

北斗は俺を見てにやりとし、

「そつという訳だから安心しろ」

と言ってくる。俺はこのまま認めるのもしゃくだから、

「内藤、帰るぞ」

内藤を連れて家を出た。

「良かったじゃないか」

内藤は笑っているが、俺はじろりと内藤を見、

「もし内藤が新垣の立場だったらさ、お前、手出し出来ずにいられたか？」

「うーん、無理だね」

「だろ？だから北斗も心配なんだよ…」

俺は自転車を押しながらため息をついた。

しかし内藤は笑顔のまま、

「北斗さんなら大丈夫だよ。北斗さんの心を占めているのは君だからね」

うーん、でもなあ…。

「大丈夫だつて」

…大丈夫かな？

「大丈夫」

何度も言われ、俺も段々大丈夫な気がしてきた。

その表情が表れたんだろう、内藤は俺の頭を撫でて、微笑む。

…俺、なんで内藤が好きなんだろう？

いや、何故内藤は俺を好きなんだろう？

疑問だらけだ。でも今はそんな事考えない、考える必要はないや。

たまたま惹かれあつた存在が同性だったただけだ。

それでいい、それでいいんだ。

内藤の家に着くと、俺は紅茶を入れている内藤をじっと見つめていた。

勿体無いなあ。こんないい男の伴侶が俺だなんて…。

「ん？どうした？」

俺の視線に気づいた内藤が声をかけてくる。

「なんでもないよ」

曖昧に答え、俺は内藤を手伝った。

「手伝わなくていいよ」

「いや、手伝いたい気分なの」

俺は内藤から強引にやかんを取り上げ、お茶っ葉の入ったポットに湯を注ぎ始める。

…結構いい道具を使っている。

「ねえ、これちょうだい」

「駄目だよ。これはあげられない」

「いいじゃんよ、ケチ」

わざと拗ねた俺を見て、

「…なら、別な物あげる」

そう言うとキスをしてきた。

「……」

「まだ、足りない？」

「…いや。足りた」

悔しいが、俺はキス一つで機嫌を直してしまった。

「…ああそうだ。俺の部屋に君にあげたい物が…」

その言葉にピクリと反応し、

「何？何くれるの？」

「えーとねえ、とりあえず部屋に行こうか」

「うん！」

紅茶が少し気になったので、俺はティーカップに入れてから内藤の部屋に向かった。

…また、騙されてしまった。

内藤は俺を抱きながら拗ねた唇にキスをしてくる。

なんでこうも単純なんだ？俺って…。

内藤が動いたたびに、俺は反応してしまう。

「この…詐欺師！」

俺はそう言葉を吐くのが精一杯だった。

「嘘はついてないよ。南にあげたいんだ。俺のこの気持ち全てを…」

「…もつと、別な方法があるだろう？」

だがしかし、内藤は俺を解放しない。

「いや、この方法じゃないと駄目なんだ。俺は、南の事をこんなにも想っているんだから…」

「……」

俺はもう黙って内藤に身を預けた。

だが口は黙っていてくれなかった。内藤の動きに反応する。

俺は北斗の事を考えた。今頃二人で修行でもしているんだろうか？

じいちゃんだけでなく、俺も北斗を守らないと。

こんな事で、今までの北斗の過保護さが判った気がした。  
情けないことにね…。

双子って不思議だ。

昔は先に産まれた方が弟、妹とされてきたと聞いた事があるが、今はどうなんだろう？

それによってどうこう変わる訳ではないけども。

何故急にこんな事が今になって気になるんだろう？

「…ほら、他の事は考えないで。今は俺だけを見て」

内藤が俺を自分の方へ向かせ、キスをしてくる。

こうも思惑通りに動かされるのはしゃくだ。

俺は内藤を引き寄せ、首にキスをした。そして強く吸う。

「あつ。やったな？仕返しだ」

故意につけたキスマークを確認するように触ると、動きが激しくなってきた。

「ちよつと…」

俺はまだ慣れていないので、その動きに耐えられない。内藤に強く

しがみつきの、この感覚に涙が出そうになる。  
もう駄目だ…。

俺が限界状態でいると、内藤も同じなのか、二人で同時にイッてしまった。

「親父さん、いつも遅いのか？」

シャワーを浴びて身体を拭いていると、ふと気になったので聞いてみた。

「親父はプログラマーだからね、帰ってこない日もあるよ」  
そうなのか。

俺は家に誰かがいるのが当たり前になっているから、その寂しさというか、そういった感情にはいま一つピンとこない。

でも内藤にとってはそれが小さい時から当たり前になっていたのだろう。

だからこんなに落ち着きがあるのか。

もし良かったら、俺が泊まっても…。

言いかけてやめた。

時には一人になりたい時だってあるだろう。

じいちゃんにはあちゃん、父さんに母さん、東吾兄ちゃんに西伊兄ちゃん、北斗…。

俺の家庭にはそれだけの存在がいる。

俺は内藤の寂しさを取り除く事は出来るだろうか？

判らない。

でも内藤なら一人でもやっていけるだろう。

隠さなくてもいいんだよ。寂しい時は言ってくれれば。俺が守ってやる。

俺は内藤に抱きついた。

内藤はそれを受け止めてくれる。この安定感が気持ちいい。

「南…」

「何？」

もしかしたら、俺は泣いていたのかもしれない。でもいい。いつか内藤はいい人を見つけて結婚してしまうかもしれない。でも今は。

今だけは俺の傍に居て欲しい。

俺って欲張りだよな。

心の中で苦笑いする。

唐突に抱き上げられ、俺は宙ぶらりんのまま、内藤の部屋に連れていかれた。

「さあ、服を着て。でないとまたしたくなる…」

その言葉に俺は慌てて服を着る。

そういえば紅茶が残っているはずだ。

「紅茶飲もうよ」

「もう冷めているから、入れなおそうか？」

「いや、いいよ。飲むから」

俺達は台所に向かい、冷めた紅茶を飲んだ。やっぱり紅茶はストリートが一番好きだな。

「そういえば言霊って…」

内藤が何事か考えながら口を開いている。

「言霊がどうした？」

俺は聞き返した。

「言葉に宿るんだよね、そうしたら俺は南の術に陥ってしまったのかもしれないね」

「術？俺は何にもしてないぞ？」

すると内藤は俺に向き直り、

「いや。確実に術にかかっている」

そう強く断言するには、何かあるのだろう。

俺が、どんな術を寛にかけたと言っただ？

「自分でも不思議だったが、それで納得がいったよ」

何か知らんが一人で完結しようとしている。

「だから、俺がどんな術をかけたっていうんだよ」  
内藤は答えた。

「恋っていう術にね」

「……」

俺は、そんな卑怯な手は使わない。

その表情が表れたんだろう、内藤は笑って、

「冗談だよ」

と済まし、紅茶を飲みだした。

恋か…。

恋ならむしろ内藤の方がかけたんじゃないのか？俺はそんな気がする。

「とりあえず。俺はそんな卑怯者じゃないから」

紅茶を飲み干し、俺は立ち上がった。

「もう帰るのかい？」

「うん、北斗の修行に付き合わなきゃね」

「なら、俺も行くよ」

「いいよ、別に来なくても」

「いや、行く。俺も南を守る位強くないといけないからね」  
そう言って内藤は食器を洗い出した。

…こりゃ、止められそうにないな。俺は寛が洗い終わるまで待っていた。

「おまたせ。じゃあ行くこう」

「ああ」

寛が自転車を取り出すのを待って、俺達は家に向かった。

道着に着替えて道場に行くと、北斗一人で座禅を組んで瞑想していた。

今までにない気を感じる。これも、共鳴者が現れたからか？

俺達は北斗の隣に座り、同じように座禅を組む。

「 帰ったか」

目を閉じたまま、俺に声をかけてくる。

「うん。新垣は？」

「あいつは今頃家で動けずにいるだろう。ちょっと激しく修行しすぎた。おじい様が容赦しなくてな」

口が笑っている。

「それより、何故内藤君がいる？」

「俺が、一緒に修行したいって言ったのですよ、北斗さん」

内藤の返事を聞いて、北斗は笑い出す。そして、

「よかるう。相手してやる」

そう言っていると立ち上がった。

俺も立ち上がり、北斗に向き直る。

「内藤君、適当な時間が来たら、『はじめ』と言って欲しい」

「判りました」

俺達は真剣な表情で始まるのが今か、今かと待っていた。

俺はどの術を使おうか迷っていた。

静けさが満たすこの道場内で、時計の秒針の音だけが響きわたる。

「はじめ！」

内藤が声を出すと共に、俺達は言霊の応酬を始めた。

口から出る言霊。

それを否定しつつこちらも攻撃を繰り出していく。

それがとてもリズムに乗っている気がして、俺は微笑んだ。

その笑顔に気を取られたのか、北斗の動きが一瞬止まる。

そして、北斗も笑顔になる。

きつと俺達が血の繋がりがなかったら最強のコンビだっただろう。

でもいつかは巣立ちの時がやってくる。

それでも。

この月日の事は忘れない。

俺はありったけの思いを込めて言霊を発した

「幸！」  
幸

(後書き)

よろしかったら感想をお待ちしています

(・・)っノ口 チンチン

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6613o/>

---

君との共鳴

2010年11月2日14時27分発行